
FRONT MISSION ～SCOUTING PARTY～

ACES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FRONT MISSION ～SCOUTING PARTY～

【Nコード】

N0444B

【作者名】

ACES

【あらすじ】

FRONT MISSIONというゲームのファンフィクションです。ハフマン紛争で偵察隊が見たものとは！？

第一話 着任（前書き）

専門的な用語がたくさん出てきます。出来るだけ補足していますが、不明な点があれば質問してください。その都度適当な措置を講じたと思います。最後に、中傷その他のマイナスな意味合いは含めていません。御了承下さい。

第一話 着任

二十世紀初頭。

世界は、アジア諸国の連合国家、OCU（オシアナ共同連合）とアメリカ大陸の統一国家、USN（ニューコンチネント合衆国）の、二大勢力の対立が激化していた。

ウ、アンツァー（WAP）と呼ばれる、ロボットが開発された。人間に近い動きを再現した機動戦闘兵器で、地形を選ばない走破性、柔軟な適応能力、単員で操縦できる有利性から、世界各国で採用され、戦場の光景は一変した。ウ、アンツァーの急速な普及の原因は、ウ、アンツァーの多くが国に関わらず共通規格だからだった。

そんな中、太平洋に一つの島が隆起してきた。

場所は、OCUオーストラリアとUSNの間。

ハフマン島と名付けられたその島には、豊富な地下資源が眠っている。OCUとUSNは、その地下資源と領土を巡って戦闘を始める。後に第一次ハフマン紛争と呼ばれる戦いは二年間続き、メール河を国境にハフマン島は二分された。そしてここ、USN領ルーピディスに一人の男が赴任するところから物語は始まる。

彼がこの島について最初に感じたのは、辺境の島とは思えないということだった。

「ここが緊張状態にある島の都市とは思えねえな・・・」

USN軍のウ、アンツァーパイロットのワタル二等兵は、訓練で様々な作戦を立案し成功している。近接戦に於いて銃器による攻撃を主とする、アサルト担当だ。

「そりゃそうだ。国境線は島の中央部のフリーダム市の東にあるメール河だ。ここにそんな緊張は必要ないんだ。そんなことより、仕事だ、仕事。ワタル、ボサツとしてるとウ、アンツァーに潰されるぞ。」

訓練期間から行動をとにするウ、アンツァーパイロット、タケシ

は急かすように言った。

ワタル達が降り立ったルーピデイスは、重工業が盛んだと言うが、実際のルーピデイスはワタルの予想を超えていた。街には車両の他に、多くのウ・アンツァーが所狭しと動き回っている。それらは、作業用の民間機の他に、輸送機に乗り込む、様々な武器を搭載した軍用機や、警察のウ・アンツァーまでいる。

「こんなにたくさんの方、アンツァーが・・・おい見ろよタケシ！新型だ！」

ワタルが指差す方向で、一機のウ・アンツァーが格納庫らしき建物に入っていた。

「あれはジェイドメタル社製のゼニスだろ！？どこが新型だ！」

「でも、改良されてるぜ。」

「俺には同じに見えるよ。」

「同じパイロットなら機体の違いくらい理解しろって。」

「俺はランチャーなんだよ。知るのには残弾数と装甲だけだよ。」

「敵の機体の状態は知らなくていいのか？」

「細かいことはFCS（ファイアーコントロールシステム、火器管制のこと）がやってくれるから、敵の機動力は知らなくていいんだよ。」

「接近されたらどうすんだよ。」

「お前アサルトだろ。お前の仕事だ。」

「新入りだな？さっさと着いてこい！」

不意に現れた整備兵が二人を無理矢理格納庫に引きずり込む。

「さあ、さっさと乗り込んで目的地まで行くんだ！」

急に言われて、ワタルとタケシは困惑した。

「目的地って？」

「お前ら混成機甲大隊所属の偵察隊に配属されたなら、分かっているだろう？」

「いや、全く。」

「辞令読んでやるからよく聞けよ。【大隊所属の偵察隊は補充が済

み次第メール河国境線OCU領を威力偵察。」以上だ。」

「そんな。」

「俺は整備主任のライツだ。お前らが乗ってるのは最新型だ。間違っても撃墜されるなよ!!」

ワタルがウ、アンツァーに乗り込もうと動くと、一人の士官が話しかけてきた。

「ワタルってのはお前か？」

「は、はいっ！」

「ニャン伍長だ。お前と一緒に前線に立つのは俺だ。間違っても誤射するなよ二等兵。」

「イ、イエッサー！」

「俺とお前は最新型のゼニスに乗ることになる。機動力は全然違うから、現地で感覚掴めよ。ちなみに今回は左腕にマシンガン装備してあるからな。」

「俺はどれに乗ればいいんですか？」

タケシが立ち往生していると、整備兵から叱咤を浴びた。

「馬鹿か！起動してないウ、アンツァーはあれだけだろ！」

そういつて、兵装担当の整備兵は一機のウ、アンツァーを指差す。

「ウ、アリアントだ。両肩にロケットを装備してる。お前がタケシだろ。撃ち尽したら離脱しろよ。念のため左腕にシールドを装備してるが、機動力がない機体だから、狙われたらシールド構えながら距離を稼げ。攻撃されることが前提の戦いなんだからな。すぐには逃げるなよ？」

「うっ！だ、大丈夫です。」

タケシがウ、アンツァーに向けて走り出すと、起動してないウ、アンツァーの隣でランチャーを換装しているウ、アンツァーから拡声器で叫ばれた。

「お前が新入りだな？俺はトム伍長だ。お前の隣でランチャーを努める。俺から離れず、近付きすぎるなよ。」

『こちら第二小隊。輸送機に搭乗した。命令があるまで待機する。』

「全機、輸送機に搭乗。ランチャーが先発だ。」

最後のウ・アンツァーが輸送機に乗り込んでしばらく経つと、輸送機は西へと飛び立った。

ワタルとタケシが配属された第一小隊は、二人の着任と同時に最前線へと送り込まれた。

第一話 着任（後書き）

感想や、描写をこうしたらいい、ここが分からなかったなど、小さなことでも構いません。不明な点あれば質問して下さい。

第二話 威力偵察

メール河。ハフマン島北部にあるウェイン山脈から流れる河で、ハフマン島を二分する国境である。メール河から東はUSN、西はOCU。メール河の南方には、新しくラークバレーという都市が建設されている。

「着任早々任務、それもメール河の警備かよ。」

「もうすぐ警備から威力偵察の時間だ。」

「しかし、たかが偵察になんで大隊規模の部隊を投入するんだ？」
「威力偵察は敵の反撃で、敵の規模の調査をするってのが目的だろ。例えばお前が相手だとして、新たに侵攻してきた敵が弱ければ一部の部隊で対応するだろ？それじゃあまり意味はない。大部隊が侵攻してきたら大部隊やトラップで対応するだろ？その部隊規模やトラップの有無を調べるのが威力偵察だ。お前は訓練中何をしてきたんだ？」

「何をつて、ウァンツァーの操縦訓練と、ランチャーの選抜試験。他の勉強なんかしてない。」

「まあ、百聞は一見に言うしな。実戦で理解すればいいさ。」

「そういうこと。」

『第一小隊。全機戦闘体勢。これよりランチャー班降下せよ。』

「ワタル、なんでUSN領にランチャーは降下するんだ？自国領土なのに。」

「降下すればわかるから。さっさと降りろ！」

『降下！』

小隊長の掛け声と共に、メール河付近の狭い森林地帯にランチャー装備のウァンツァー部隊が降下して行く。タケシが搭乗する機体は殿から三番目に降下した。

『ランチャー班十二機、着地成功。第一小隊、第二小隊所属のランチャー班は幹線道路沿いの敵部隊に攻撃。第三小隊所属は待機。』

「新米、俺に着いてこい。トラップに気を付けてな。」

「タケシです。」

第一小隊所属の四機のウァリアントのうち、先頭がトム伍長、左にニック伍長、右にタケシ、殿にトッド伍長の隊形で進軍する。暗闇のジャングルで、四機のウァンツァーがOCU領に向けて接近していた。

視界が開けると、そこにはメール河が流れていた。そして河の向こう側、OCU領には敵の前線基地が見える。

「止まれ。全機、準備はいいな。」

「こちらニック。左翼敵指揮所、ロックよし！」

「トッド機、敵ウァンツァーにロック！」

「こ、こちらタケシ。右翼敵兵舎。ロック！」

「時間まで三十秒。」

ランチャー班に緊張が走る。

「二十秒。」

「こちら第三小隊所属ランチャー班！敵のパトロール隊が我々に気付いた！ウァンツァー起動まで時間がない！」

「全機、発射！発射！」

四機が放ったロケット弾が、それぞれの目標まで飛行していく。発射から数秒後、メール河国境線は業火に包まれた。爆発による灯りが辺りをぼんやりと照らす。ランチャー班がロケット弾を撃ちつくし、ランチャーを廃棄した瞬間、辺りを緑色の閃光が覆った。照明弾の発射により、ランチャー班は敵に発見された。

「攻撃、来るぞ！正面からウァンツァー二機！後退！」

「上空から、ヘリが三機！」

「迫撃砲だ！来ます！」

迫撃砲の発射から数秒後、ロケット発射地点の辺りを砲弾が耕す。ニック機の正面で、一発の砲弾が炸裂する。幸いにも、シールドと森林の木々のお陰で大した損傷もなく後退できた。

「敵ウァンツァー、接近！ギザタイプです！」

トッド伍長がそう言うと、森林の向こう側、OCU領から、ウゝアンツァーからと思われる銃声が響く。完全にこちらを捉えていないのか、マシンガンの弾は誰にも当たらずに森の奥に消えていった。

「警告、警告！敵の別働隊が接近！」

「こちら、ニック伍長！第三小隊所属ランチャー班、そいつらにぶちこんでやれ！」

「もうやった！一つは足止めしたが、あと三機向かってる！」

『アサルトチーム、降下開始！』

ランチャー班のパイロットから見える距離まで敵が接近した時、敵のウゝアンツァーから攻撃が始まった。敵の一機がタケシ機に急接近する。その右腕には格闘用のロッド（ウゝアンツァーの格闘用の棒）が握られていた。敵のウゝアンツァーがふりかぶると、上空から光の雨が降り注いだ。

「うおおおお！」

敵のウゝアンツァーは上を見上げウゝアンツァーを探すが、その時すでに懷に敵機は降りていた。ワタルは敵の懷に入り、至近距離からマシンガンの弾をボディに撃ち込んだ。後続のアサルトが着地して、敵を攻撃するころには敵機はボディに撃ち込まれた弾丸で活動を停止していた。

「一機撃墜！まだ二機います！」

ワタルに続いて第一小隊所属のウゝアンツァーが降下してくる。ニャン伍長の降下と同時に、ランチャー班の四機は森の奥へと後退した。

「隊長、敵増援ありません！」

「待て、遙か遠くからロック！全機回避！」「回避って、一体どこから！？」

「敵ウゝアンツァーは背中にセンサーバックパックを装備してる。アイツがいるとミサイルはどこまでも飛んでくるぞ！このままでは撤退できない！」

「ニャン伍長！先に仕掛けます、続けてお願いします！」

ワタルのウ、アンツァーが駆けると、今までウ、アンツァーがいた位置に数発のミサイルが着弾し、炎と煙が辺りを埋め尽した。敵の砲火が、ワタルの乗るウ、アンツァーージェイドメタルライマン社製ゼニス改、アサルト仕様一に集中するが、その隙にニャン伍長をはじめ、フォックス伍長、レオン伍長、ジェイソン伍長、ラット伍長、ゲイル伍長、シュレア少尉が攻撃を加える。

「シュレア隊長！ランチャー班が撤退しました！」

「よし！連中が離脱する前に撃破するぞ。奴らに情報を渡すな。」
そういい放ってシュレア少尉は側面からレコン機（センサーバックパックを搭載したウ、アンツァー）に向けてショットガンを発射すると、ワタル機に狙いを定めたレコン機の、マシンガンを装備した左腕がバラバラに砕けた。

「ニャン！パイルバンカー（対ウ、アンツァー、対装甲車両用の釘撃ち機構。ウ、アンツァーの格闘用の武器）だ！」

「分かってます！」
最新型のスペックを活かした驚異的なスピードで、ニャン機は敵のレコン機に接近する。

敵のウ、アンツァーからニャン機に向けてマシンガンが発射されるが、ニャン伍長の巧みな回避と最新型の驚異的な機動力になすべはなく、ニャン機のパイルバンカーが正確にコックピットを貫いた。ニャン機が離れると、活動を停止したレコン機が爆発した。

「残り一機！」

敵のウ、アンツァーは森の奥へと後退しつつ、マシンガンを発射した。なかなかの腕前らしく、八機の最新型ウ、アンツァーの攻撃を巧みに回避しながら、確実に攻撃を加えてきた。

「こちらレオン。脚のバランスをやられた。先に離脱します！」
「こちらフォックス、弾切れです。装填してから再び追います。」
ワタル機の目の前で、急激な方向転換をした敵機が現れた。その時既に敵のウ、アンツァーの右腕のマシンガンは火を吹いていた。ワタルは辛うじてその攻撃を左に機体を流して回避した。

「やられる！」

ワタルが最期を覚悟すると、不意に敵の銃声が止んだ。再びトリガーを引くウァンツァー。しかし、弾丸は発射されない。

「弾切れかつ！」

ワタルは一転して、マシンガンを敵のウァンツァーに向けてトリガーを引くが、数発で攻撃が止んでしまう。コックピットのモニターに、EMPTY（残弾無し）の表示が出ていた。ワタルはすぐさまリロードをしようとしたが、敵のウァンツァーは弾の切れたマシンガンでワタル機に向けて投げつけた。機体を翻しそれをやりすごすと、敵機は体当たりを敢行していた。

「うわっ!？」

辛うじて転倒を免れたものの、予備弾倉を落としていた。ワタルが再び身構える。

『ああ、やめだやめ！投降する！』

と、敵のウァンツァーから拡声器で投降の宣言がされた。

「え?？」

そこでようやく、レオン機を除いたシュレア少尉率いる六機が到着した。

「所属を明らかにせよ。」

『マイク・ジェームズ。OCU国境守備連隊麾下の傭兵部隊隊長、の予定だった。』

「予定?」

『正式な辞令の来る前にあんたらが攻撃してきたんだ。ところで、あんたら独立部隊なんだろう？俺を仲間にしてほしい。』

「は?」『今から数分以内に増援部隊が到着する。国境守備連隊の編成と装備を教える。だから、連れていってくれ。俺はこの紛争を終わらせたいんだ！頼む!』

「・・・。大隊長の指示があるまで、行動をとんでもいいが、一番前があるけ。下手な真似をしたら容赦なく撃つからね!」

『了解だ。隊長!』

「よし。すぐに撤退するぞ。フォックス。マイク機の通信を遮断して、受信のみに限定しろ。従わなければ撃つ。」

『信用してくれよ。』

「隊長！敵のヘリ部隊はランチャー班へと迂回したようで、その」「なんだ？」

「通信が途絶えました。」

『あのヘリは強力なECMを装備してる。早いとこ基地に連絡入れないと、基地の位置がバレるぞ。』

「全機、弾の補充！」

『待った。例のヘリ部隊は俺がやる。そしたら信用してくれよ。』

「いいだろう。ただし、」

『妙な真似したら撃つ、だろ。大丈夫だ。』

マイクは先程投げつけたマシンガンを拾いあげて弾の補充をすると、愛機のプロストを駆って、森の奥へと消えた。

タケシは目の前にいる三機のウ、アンツァーに続いて、東に向けて移動していた。各機は電波妨害により通信を使えないため、機体を隠しながら慎重に移動しなくてはなくなった。そのため、タケシは疲れきっていた。トム伍長の操縦するウ、アンツァーが止まると、それにならってニック伍長、トッド伍長、そしてタケシ機が停止する。

先頭のトム伍長のウ、アリアントが発見を避けるために出力を押さえた発光信号で合図を送ると、ランチャー班のウ、アンツァーは再び前進する。

その瞬間、上空でランチャー班を探していたヘリがガトリングガンを斉射してきた。ハフマン島の夜の森林へむけて大量の光の雨が降り注ぎ、ヘリはフラッシュバックで明滅した。タケシはウ、アンツァーの姿勢を下げるが、運悪く命中した弾丸は跳弾してしまう。コースを逸れた弾丸は上空に向けて飛んでいく。

「タケシ、発見された！無線封止は終了だ、逃げるぞ！」
四機のウ、アンツァーが一斉に動き出す。

敵のヘリはガトリングガンが跳弾した地点へロケットを発射するが、既にウ、アンツァーはバラバラに移動していた。ロケットの着弾した箇所は噴炎が上がり、存在していたはずの木々は薙ぎ倒されていた。続いて、周辺に向けてフリーダム市からの長距離砲が火を噴き、ヘリのロケットの数倍の威力で木々を薙ぎ倒していく。

「くそっ！右腕が吹き飛ばされた！シールドはもうもたない。」
「ニック！回避しろ！」

敵のヘリはニック機が被弾したのを見つけ、ロケットで止めをさしてきた。ニック機は巧みに回避するが、最後の一発は避けきれずにシールドで防御した。シールドは砲弾の破片をもろに浴びて、着弾とともに碎け散った。

「シールドもやられた。これ以上攻撃されたら耐えられない。」

「トム伍長！この先の幹線道路に敵性反応一機、ウ、アンツァー！挟みうちです！」

「！来るぞっ！」

幹線道路から急接近する機体はマシンガンを構えると、味方であるはずのヘリを攻撃した。突然のことに反応出来なかったヘリは、胴体に直撃を受けて爆発した。

『攻撃中止！味方を攻撃してる！』

『知ってるよ！』

味方を撃墜したOCU所属のウ、アンツァーは攻撃中止勧告を無視して、勧告をしたヘリを攻撃、撃墜した。残った一機のヘリはロケットでウ、アンツァーを攻撃するが、素早く反応したウ、アンツァーはそれら全てを回避し、逆にヘリを撃墜した。

『わけねーぜ。』OCU所属のウ、アンツァーは反転すると、拡声器を用いて説明した。

『あー、そのUSNのランチャー班。幹線道路よりローラーダッシュで離脱せよ。』

「お前は何者だ？」

『傭兵だ。シュレア少尉率いる分隊に世話になってる。』

「わかった。」

数十分後、威力偵察に出ていたウ、アンツァー三十六機の内の二十四機と、傭兵のウ、アンツァーが前線指揮所に帰還した。

作戦終了から一時間後、シュレア少尉は大隊長のテントで、報告書を提出していた。

「撃破したウ、アンツァーは八機に、車両二十両、ヘリを三機か。損害は？」

「ウ、アンツァー二機、パイロット一名死亡、一名軽傷。」

「第三小隊のライアンか。それから例の傭兵だが、死んだライアンの補充兵として編成してくれ。」

「やつの報酬は？」

「支給される物資を好きに使えといっておけ。それから我が大隊は二時間後に出撃だ。準備を怠らないように。今度はフリーダム攻略戦だ！」

「了解！」

第三話 ルート確保

OCU領フリーダム市。第一次ハフマン紛争勃発と同時にウ・アンツァー同士初の大規模な戦闘が行われた都市である。

「今回の我々の任務は、我が軍のフリーダム市攻略部隊に先駆けてフリーダム市への侵攻ルートを開くことだ。具体的な内容を説明する。」

大隊長はそういって、ホワイトボードに張り付けてある作戦地図の黄色の部分に赤い円を描いた。

「現在、OCU領へ侵入するルートのうち、ウェイン山脈山麓を通過するこのルートだけ確保が遅れてる。我が大隊はスリングヘリで三機ずつ降下してもらい、周辺の確保と敵部隊の撃破を行う。現時点で、姉妹大隊の機甲師団麾下の機動中隊が作戦区域で交戦中だ。質問は？」

作戦会議に参加していたシュレア少尉が手を挙げる。

「私の中隊は偵察中隊です。いくら中尉が行方不明だからといって、少尉の私が偵察中隊を率いることは指揮系統の混乱が考えられます。また、偵察中隊も周辺確保の戦闘に参加するのでしょうか？」

「既に、対策は講じてある。偵察中隊もこの戦闘に於いては前線に参加してもらう。我が大隊で、最も臨機応変に対応でき、かつ最新のウ・アンツァーと腕利きのパイロットが多いからな。よろしく頼む。シュレア中尉。君は中尉だ。分隊の隊長は適宜選抜してほしい。」

「はっ！」

「それから、どうやら岩山にゲリラ戦法を得意とするウ・アンツァー小隊がいるようだ。奇襲とトラップに気を付けろ！」

格納庫では、多くの人間が作業に没頭している。

「ライツの兄貴！俺の機体の左腕にマシンガン、右腕はパイルバンカーを。バックパックを補助ブースターに換装しておいてくれ。」

ニャン軍曹はそういうと、衣料担当の補給兵から、葉巻を受け取った。

「やっぱこれがないと始まらないな。」

出撃前の喧騒の中、ワタルは機体のチェックに明け暮れていた。マイクとの戦闘で所々小さな異常が起きたからだ。

「凄いな・・・」

ワタルの機体の左腕、前回の戦闘でマシンガンを装備していた腕の関節部分に数発の弾痕がある。

素人目に見ればただの弾痕だが、マシンガンの特徴をうまく利用してマシンガンの命中力を減少させている。

具体的に言えば、マシンガンは命中力を連射でカバーした武器である。

連射した際には腕に大きな反動が生じる。

ウ・アンツァーのマシンガンは人間よりも巨大な物で、それから発射される弾も人間の胴体ほどの大きさがある。それを毎秒数発発射するほどの連射が続けば、関節部分に食い込んだ弾によって命中力が低下していくのだ。ライフルやショットガンでは意味を成さない、敵の装備がマシンガンだと看破した上での攻撃だった。

「左腕を換装してマシンガンを装備しておいて下さい。右腕にはシールドを。」

言われた整備兵は、疑問に思っただけで訪ねた。

「大したダメージじゃないから修理できるぜ!？」

「関節に弾がある。命中力の低下が考えられます。主任に報告しておいてください。」

「なるほどな。マシンガンだから、命中力に影響があるってことか。メーカーにも報告だな。」

ウ・アンツァーは第一次ハフマン紛争から大規模な戦闘に参加している。

そのため、ハフマン紛争は最新のウ・アンツァーがすぐに次世代のウ・アンツァーに抜かれるということが頻繁にあった。

したがって現地の部隊は様々なパーツを流用して、カスタム機を生産していった。

カスタム機には、単に各パーツが別の機種のものや装甲の増設など多岐にわたっている。特に偵察隊はその性格上、様々なパーツを組み替えて任務に対応することが多かった。純粹に戦闘する任務意外は、純正な機種のウ、アンツァーは無きに等しい。

今回は制圧任務であるが、ワタルは関節の装甲の増設をしてほしかった。

しかし、作戦中のために延期になった。全てのウ、アンツァーがスリングヘリ（ウ、アンツァー移送用のヘリコプター。胴体部分に三機のウ、アンツァーを固定できる）に固定されて飛びたつ頃には、USN軍戦車の群れが進軍を開始しているのが、登りはじめた太陽に照らされていた。護衛のウ、アンツァーが合わせて進軍している。「降下地点まで十四分。」

眼下には、真新しい戦闘の痕跡が増えてきた。中にはまだ燃えている機体もあった。

「結構、敵の部隊は多いな。」

「どうやら、そうらしい。全機、油断するなよ。」

「隊長。」

「どうした、マイク軍曹。」

「下に敵のウ、アンツァーはほとんどいません。味方の死体ばかり。ウ、アンツァーは外見にあまりダメージは見られません。」「何がしたい？はつきり言え。」

「敵はスナイパーです。早いとこ降ろさないと、ヘリごと落とされます！」

マイク軍曹がそう言うと、眼下にヘリごと破壊されたウ、アンツァーが目立ちはじめた。

「ぜ、全機。降下っ！」

「待った！まだ落とすな！岩山に降ろしてくれ。」

編隊飛行で飛んでいたヘリのうち、第三小隊のウ、アンツァーが搭

載されたヘリが直撃を受けた。

「くそっ！」

慌ててマイク軍曹らは降下したが、先頭のウ・アンツァーは降下中にコックピットを撃ち抜かれて爆発した。

「一機やられた！」

二機目はシールドを構えるが、脚を撃ち抜かれた。着地に失敗したウ・アンツァーは、なすすべもなく撃ち抜かれて四散した。

無傷で着地したマイクは、すぐさま岩陰に機体を隠した。

「マイク機は無事です！」

少し離れた窪地で、シュレア中尉率いる第一小隊が身を隠していた。第二小隊と第三小隊の残りも別々に身を隠している。マイクはスナイパーライフルの弾を装填して、岩の隅から見当をつけた、一回り大きな岩山の様子を窺った。ウ・アンツァーのカメラの倍率を上げると、予想通りスナイパーライフルを持ったウ・アンツァーがいた。「こちらマイク。機動力のある機体でスナイパーの気を引いてくれ。その隙に倒す！」

そう言うと、マイクは敵ウ・アンツァーのいる辺りに向かって、隅から片腕だけで支えてライフルを発射した。マイク機が素早く身を隠すと、岩の一部がライフルの弾で削れた。

「この中で最も早いのはワタル機だな。」

「はいっ！」

「ワタルだな？よし。所々に岩があるから、陰に隠れては飛び出せ。俺の合図で飛び出せ、隊長。」

「えっ！？隊長ですか？」

「シールドを！」

言われるがままシュレア機が頭を出す。シュレア機が機体を窪みから出すと、敵のスナイパーの狙いはマイク機からシュレア機へと向けられた。同時に、マイク機は敵のウ・アンツァーに狙いを定めた。「いまだ！ワタル！」

マイクとシュレアの合図は同時だった。その合図と同時にワタルは

ウ、アンツァーを駆けて、窪地から右正面にある岩へと突撃した。敵のウ、アンツァーの一撃はシュレア機のシールドを破壊し、続いてワタル機に狙いを定めた。

マイクはライフルの照準を正確に合わせて、撃った。しかし、ワタル機の機動修正によって敵のウ、アンツァーはマイク機の狙ったコックピットではなく、ライフルを持つ右腕に命中した。間髪入れずにマイク機がライフルを発射すると、再びその弾は右腕に命中した。右腕は爆発し、ライフルも砕け散った。

「よし。ライフルを破壊した！」

それを聞いたシュレア中尉は、進軍を再開した。

「全機、周辺を警戒。第一小隊、第三小隊は索敵。第二小隊は例のスナイパーを含め、周辺の確保。」

各小隊は互いを援護しながら、散開する。マイク機は撃墜された二機のウ、アンツァーの調査を始めた。

「マイク軍曹、一体何をされているのですか？」

第三小隊所属のメカニック（ウ、アンツァーにおけるメカニックは、戦場での弾薬の補給や簡易的な修理を行う機体の総称である）のキッド伍長が、マイクの行動を怪訝そうに訪ねてきた。

「調査だ。これをやるとやらないのでは戦闘に大きな差があるからな。」

「差、ですか？」

「そうさ。一機目は完全に奇襲に近い。なんせ降下中にコックピットを撃ち抜かれたんだからな。誰だって驚くさ。二機目はシールド構えたけど、着地を阻止。そのままズドン。こういうことか分かるか？」

「い、いえ。」

「敵は俺達の予想以上に強い。」

「はい。」

「そこで問題だ。今この時点から考えられる敵の弱点は？」

「弱点、ですか。そうですね。・・・チームで行動しないところで

しょうか？」

「それはどうかな。スナイパーは隠れていることで敵に位置を悟らせずに攻撃する。これによって、安全に敵を叩くことができる。あるいは敵の作戦を遅らせたり、撤退させて時間を稼ぐこともできる。もし巨大なウ・アンツァーが何機もいたらだ。バレルだろ。位置が。今回も目的を果たしたからこそ、敵はすぐに退いたんだ。まあ、ライフルもぶっ壊したがな。つまり、お前の意見は外れだ。」

キッドはマイクの理論に舌を巻いた。どうやらこの軍曹はただの傭兵じゃない。そう考えていた。

「軍曹はどうお考えですか？」

「狙うとすれば、敵の本隊だと思う。ヘリから見た戦闘痕の中に敵のウ・アンツァーはほとんどいなかった。やはり、時間稼ぎだろう。」

「とすると、敵の本隊はどこに？」

「まあ、そこらじゅうにいるだろうが、やはり本命はフリーダムだ。敵は俺たちの攻勢をキャッチしたが、準備に時間が足りないんだだろう。」

「大隊長に連絡しますよ。」

「それで正解だ。各々が仕事をこなせば組織は強いんだ。」

「はい。」

キッドがウ・アンツァーのカメラを辺りに巡らせると、かなりのU・SN軍の兵器がだだの鉄の塊になって転がっていた。中にはまだ燃え盛る戦友のウ・アンツァーがあった。

マイクは撃墜されたウ・アンツァーからマシンガンを拾い上げると、キッド機にそれを持たせた。

「これは・・・？」

「敵がいる。」

マイクはライフルの弾倉を交換しながら言った。

「ど、どこに。」

マイク機はアイテムバックパックからマシンガンの弾倉を取り出し、

装填しながら聞いた。

「左から、自走砲が三両。こちらマイク。敵の自走砲が射程に入る。気を付けてくれ。キッド。自走砲だけとは考えにくい。ウ、アンツァーがいるかも知れない。気を付けろ。」

そう言い終わる頃には、マイク機のライフルが火を噴いていた。

左から接近する三機のウ、アンツァーのうちの一機の右腕が砕けるが、敵はそれぞれの武器を放ちながら突撃してきた。

回避行動をとりながら放たれたキッド機のマシンガンの弾が先頭のウ、アンツァーを捉え、敵は転ぶようにして倒れた。

自走砲の攻撃は外れ、第三小隊の破壊されたスリングヘリに命中した。

命中した場所から噴煙が吹き上がった。それには目もくれず、キッドは二両の自走砲にマシンガンを放った。瞬く間に、自走砲は破壊された。キッドはメカニックの前にアサルトの経験があるため、戦闘の際にはリペアを使用しながら味方の援護、という戦闘スタイルから重宝されている人材だ（他の部隊からスカウトされることすらある）。

「敵の増援はなし。ゲリラ戦の得意な部隊みたいですね。」

敵のウ、アンツァーの最後の一機は巧みに回避と反撃を繰り返し応戦する。

「！なかなかやるな。だが、孤立無援ではな。」

敵がそれに気付いたのは、すでに第三小隊所属のウ、アンツァーに囲まれたときだった。

『投降しろ。』

敵機はマイク軍曹の呼び掛けに応えずマシンガンを持ち上げ、キッド機はそれを制して発砲した。弾丸は敵機の装甲を貫き、やがて爆炎とともにウ、アンツァーは活動を停止した。

「・・・こちら第三小隊。敵部隊を撃破。」

「こちら第二小隊。周辺に敵性反応なし。作戦成功。二分後に先程の戦車隊が通過します。」

「よし。このまま戦車隊の通過まで警戒だ。ニャン、スリングヘリを呼んでおいてくれ。」

二分後。戦車隊の戦車群と護衛のウィアンツァーは、偵察隊が破壊した敵のウィアンツァーの側を通りすぎていった。

第四話 フリーダム強襲

「新しい任務だ。現在、特殊機甲強襲連隊が輸送機でフリーダムに向かっている。我々は彼らに同行して、敵の戦術を調べる。」

「敵の懐に!?!」

「まあ、悪い話じゃない。これが終われば休暇が貰えるかも知れないだろ、タケシ。」

「そ、そうですね。」

「それにな。どうやら特殊機甲強襲連隊、通称ストライクワイバーンズの隊長は飛びきり美人らしいぜ。」

「本当か?」

「事実だ。前に訓練で闘ったことがあるよ。」

「本当ですか、中尉。」

そう聞かれると、シュレア中尉は苦笑いを浮かべながら答えた。

「完敗だ。手も足も出なかった。」

「た、隊長がですか!?!」

「ああ。ああいうのをトップエースと言うんだろうな・・・多分第一小隊で挑んでも勝てないだろうな。」

「・・・マジかよ。か、カッコいいじゃないか。」

「ああ。彼女は、リンはカッコいい女性だよ。冗談が通じない女だな、ふざけてからかった海兵隊員を病院送りだ。ある意味、最強だな。」

「び、病院送り・・・ワタル。余計なことすんなよ。」

「こっちのセリフだよ。あの、ウェンライト少佐だろ。俺たち少佐に叱られたことあるんすよ。」

「リンに?」

「ええ。俺とワタルのシミュレーション戦闘を観ていたらしくて。市街戦闘の訓練でした。」

「そう。タケシ機が敵の攻撃をビルを遮蔽物にして防いだ瞬間です。」

少佐が乱入してきて、俺たちを叩きのめしたんです。」

「リンが？ 彼女は見境なくケンカなんてしないはずだがな。」

「少佐曰く、『市街戦闘で遮蔽物が多くても、決して街を盾にするな。』だそうです。人一倍正義感に燃える人だと思いますよ。」

「そうです。ワタルなんか、少佐の元で戦うために必死で訓練したんですよ。その矢先にラーカス事件が発生したわけです。」

「嬉しいですよ。少佐と行動をとものにできるなんて。」

「そうだな。同感だ。さて。もうすぐだ。」

全員の顔が引き締まる。

「降下準備！」

フリーダム市に駐留していたOCU軍は、ウ・アンツァーによる強襲に万全の体勢で望んだ。しかし、時代遅れの対空砲火では当初の予想を裏切ることになった。フリーダム市街に降下した部隊、特殊機甲強襲連隊、通称ストライクワイバーンズはUSNきつての腕利きパイロットを更に絞りこんだ特殊部隊である。最新のウ・アンツァー、最強のパイロットと最高の隊長で構成されるこの部隊には旧式の装備では相手にならず、USNのウ・アンツァーはフリーダムへの強襲を成功させた。

「よし。全部隊持ち場につけ！」

リン・ウェンライト少佐が命じると、ストライクワイバーンズのエングレムを着けた機体はそれぞれ小隊規模に散開した。

「偵察隊、聞こえるか。こちら強襲連隊。シュレア・ミルフィー少尉。久しぶりだな。」

「おかげさまで今は中尉です。少佐。」

「偵察隊の第一小隊は我々と行動してくれ。大規模な実践データの収集と研究が主な任務だが、私の指揮下にある限り戦闘にも参加してもらう。」

「了解です！」

「こちらタケシ！ 敵の大部隊が西から接近中、ウ・アンツァーに戦車。」

「全機、戦闘準備。ライフル班は廃車を利用して援護、その他は通常通り！弾薬をケチるなよ！」

ワタルがバリケードがわりに配置されたいウゝアンツァー用の土嚢の陰に機体を落ち着かせたころ、彼らの後ろに新たに真紅のウゝアンツァーが降下してきた。

「ふむ。地獄の壁か。」

「よし、野郎共！地獄の壁の厚さを教えてやるぞ！」

「大尉。こちら強襲連隊指揮官のウェンライト少佐だ。いつものように行動してくれ。東の友軍の進路を確保したのち、各戦線を援護してくれ。」

「聞いたな！全機、突入するぞ！」

第六十四機動戦隊、通称地獄の壁。荒くれの猛者が集められた部隊。態度は悪いが腕は一流で、自らを盾に友軍を守る戦闘スタイルから、味方の信頼は厚い。ウゝアンツァーを真紅に染めることでも有名である。

地獄の壁が市街の奥に消えた頃、街のあちこちから銃声がこだました。同時に各小隊の無線が飛び交う。そしてワタル達の西から敵のウゝアンツァーが姿を見せた。最初に発砲したのはウェンライト少佐だった。少佐の発射したライフルの弾はローラーダッシュで接近してくる敵ウゝアンツァーの脚に命中し、転倒した敵機はそのまま慣性に逆らえずに滑り、廃車のひとつに突っ込む。

ウェンライト少佐が再びライフルを発射すると、強襲連隊のウゝアンツァーが一斉に攻撃を開始する。タケシ機の発射したロケットが敵部隊に炸裂するころには、最初に脚を撃ち抜かれたウゝアンツァーからパイロットが脱出していた。直後に敵部隊は散開してそれぞれビルなどの遮蔽物に身を隠しながらの銃撃戦に移行した。ワタルが敵にマシンガンを連射すると、敵はビルの陰に隠れた。

「ちっ！」

「ランチャー班！連中を誘い出せ！」

強襲連隊のランチャー班は赤外線誘導のミサイルを遮蔽物に隠れる

敵ウ、アンツアーに向けて発射した。

一方フリーダム東口の市外から続々と進軍する制圧部隊と市内へ強襲していた第六四機動戦隊の共同による激しい攻勢が始まっていた。フリーダム防衛の要所である街の入り口はあらゆる場所に何らかの防衛用の兵器が隠れていて、進軍は滞り始めた。

地獄の壁と共に進軍していたウ、アンツアーの一機がビルに隠されていた戦車の攻撃で撃破され、後続の戦車隊にも被害が出始めた。狙撃してきた戦車も、瞬く間に集中砲火により撃破された。そこへ、市街防衛のウ、アンツアー隊が現れた。規模から言って、遊撃隊のようだ。

「ゲッタ！ウ、アンツアーが来るぞ。叩き潰せ！」

「了解、ボス！」

真紅のウ、アンツアーが駆ける。市街戦用の迷彩を施したOCUのウ、アンツアーは三機で一つのチームを組んで闘うことがわかっている。敵のウ、アンツアー達のマシンガンはそれなりにゲッタの駆るウ、アンツアーに命中する。しかしながら真紅のウ、アンツアーは命中弾をものともせずに突撃した。

第六四機動戦隊の使用する機体はフロストタイプだ。第二次ハフマン紛争の中でも高い水準を誇る機体で、地獄の壁の機体は元々高い安定性と防御に強化が施されており、それによって高い格闘能力も飛躍的に向上している。

「くたばれ。」

ゲッタ機の右腕はロッド、左腕にはパイルバンカーを装備している。そのロッドを敵の三機のウ、アンツアーのうちの、シールドを構えた先頭の機体に振り上げる。その一撃でシールドを構えた左腕を弾くと、その衝撃で左腕は大きく浮き上がる。敵のマシンガンを装備した右腕はやや手前に引き気味だった。ロッドの一撃を防いだら、逆にゲッタ機に大打撃を与えていたかも知れない。しかし、ゲッタの駆るウ、アンツアーのパイルバンカーがコックピットに打ち込ま

れ、敵のウ、アンツァーは活動を停止した。

後ろに控えていた残り二機のウ、アンツァーが反撃しようとする、ゲッタ機の背後から恐ろしい素早さで接近してきた真紅のウ、アンツァーが、左翼の機体に真横から体当たりで連携を崩した。

それは、部隊内で最も素早いジョシー・ダリン曹長の得意技だった。体当たりを喰らったウ、アンツァーが倒れる瞬間には、部隊の中で副官を務めるデιβ・スターリング中尉の放ったマシンガンの弾が機体に穴を空け、完全に倒れた頃には爆発をしていた。最後の機体は両腕に装備したマシンガンを乱射しながら後退しはじめたが、左右から飛来したミサイルが機体の自由を奪い、グリーグ大尉の放ったライフルの弾が止めを刺した。三機編成の一チームの撃破に要した時間はほんの四十秒だった。

「リーバス、調子はいいみたいだな。」

「ああ。ミリガンにゃ敵わねえがね。」

「階級は無視か？」

「そうでした。俺は伍長、ミリガンは中尉だった。ま、戦闘中ってことで。」

「よし。このまま前進！ルートを切り開くぞっ！」

真紅のウ、アンツァーが移動するころには、フリーダム市街へUSNのウ、アンツァーが進入しつつあった。

ワタル機が敵のウ、アンツァーをマシンガンで破壊した瞬間、すぐ脇の廃車が敵のロケットで吹き飛んだ。

「こ、こいつら街を守る気はないのかっ！」

ワタルは激昂してマシンガンを連射したが、連続発射されたロケット弾が降下部隊の近くで炸裂した。その内の一発はタケシ機が遮蔽物にしていた土嚢を吹き飛ばした。

「援軍到着まで後すこしだ！ここで食い止めるぞ！」

キッド機のパックパックの中のリペアーは半分が使用されていた。一機のウ、アンツァーの腕が損傷を受けていて、キッドはマシンガンで敵を牽制しながら修理を行っていた。

敵の部隊の数はずいぶん減っていたが、未だに戦闘能力は衰えていなかった。かくして、新たに三チームが突破を敢行してきた。

「ここは通行止めだっ。他を当たれ！」

少佐のライフルは正確に敵を捉え、スクラップにしていく。運悪く弾切れを起こしてしまい、少佐は再装填を余儀なくされた。四機のウ、アンツアーが接近してくる。一番先頭にいたストライカーのウ、アンツアーは強襲連隊のマシンガンに倒れ、殿の機体はロケット弾の直撃で大破した。二機のウ、アンツアーが格闘戦に備えてマシンガンを構えると、敵の後続の戦車が次々に現れた。

マイク率いる第三小隊はすでにマイクとキッド以外は撃破され、脱出したパイロット達は対戦車用のバズーカやロケットランチャーで抵抗していた。ウ、アンツアーが戦場に登場してからも、歩兵は必要不可欠な存在だ。脱出したパイロットは今度は歩兵とウ、アンツアーを相手に生身で挑まねばならなかった。

「航空部隊の援護はまだなのか！」

「まだだ！」

タケシがロケット弾を発射すると、全ての残弾数がなくなった。

「畜生、弾がない。誰か弾を！」

誰も弾を持っていないことは分かっていた。強襲連隊のランチャー班は弾が切れた武器を外して、破壊されたウ、アンツアーから武器を拾って戦っているからだ。補給担当のウ、アンツアーでさえ、バズーカを拾いあげて戦っている。

「補給部隊はなぜこない!？」

「囲まれて身動きがとれなくなっています。いえ、こちらに向かっています! 第三四大隊一二特機中隊所属のリンクス小隊が救助したようです。東から、後二分で来ます!」

「よし。」

ウェンライト少佐はライフルの弾を再装填して、戦線に復帰した。

そこへ、降下地点の南東を制圧した強襲連隊の部隊と行動を共にしていた第二小隊が到着した。彼らの発射したミサイルは、降下部隊に接近していた二機のウ・アンツァーを粉碎した。

「レオン無事です！ジェイソンがやられました。他は無事です！」

「こちら偵察隊隊長のシュレアだ。少佐。偵察隊は任務を優先して離脱します。」

「分かった。東から進入してくる友軍に援軍要請頼む。また会おう。中尉。」

「はっ！」

「なぜです？この状況で退却ですか！あと少しで撃退出来るからって！」

「いいかわタル！偵察隊は情報を持ち帰らなきゃ意味が無いんだ！お前ら偵察隊がもたらす情報が今後の戦闘の鍵を握るんだ。だから、我々のことは気にせず、早く離脱しろ。命令だ！」

「・・・はい。」

すぐそばで、タケシ機は両腕の急遽装備したマシンガンを撃ちまくりながらローラーダッシュで後退している。ワタルはボロボロになったシールドを外すと、全速力で戦線を離脱した。

フリーダムの入りを確保した地獄の壁は、進軍する部隊の援護をしていた。

そこへ、偵察に出ていたゲッタが戻ってきた。

「ボス！降下地点の敵部隊がまだいます！」

明らかに、安全な部隊を援護するよりはウ・アンツァーを有効に使えるだろう。

「ようし、野郎共、強襲連隊に群がる虫を踏み潰しに行くぞ！」

「オーケイ、ボス。」

真紅のウ・アンツァーは、再び前線へと駆けていった。

偵察隊が後方の補給基地にたどり着くと、入れ替わるように制圧部

隊の第三波のウ・アンツァー小隊が出撃した。

「……」

基地に戻ってからも、誰も喋らなかった。喋っているのは整備兵ぐらいのものだ。

ルートを確保する作戦から制圧作戦にかけての連戦で、部隊の半数を失ったのも理由のひとつだ。それより気になるのは、脱出したパイロット達と強襲連隊の安否だった。誰からともなく無線機に耳を傾け、飛び交う情報を拾っていた。どうやら強襲連隊も脱出したパイロット達も、地獄の壁も無事のようにだった。

フリーダム攻略戦はUSNの勝利に終わった。僅か十時間の戦闘で、OCUの守備隊はほぼ壊滅。残存兵力は市庁舎に集結し、徹底抗戦を唱えた。

数日後、地獄の壁やリンクス小隊などの活躍により、市庁舎を完全制圧。

かくして、フリーダム攻略戦及び制圧作戦は完了した。

第四話 フリーダム強襲（後書き）

有名人がいつぱいできました。質問があれば遠慮なくどうぞ。

第五話 密会

フリーダム攻略戦の翌日。ワタル達は警戒任務についていた。とは言え、敵の襲来を思わせる動向はみられず、偵察衛生からの情報でもOCUは撤退以外に目立った行動はないそうだ。

「隊長。前から聞きたいと思ってたんですが。」

マイクはリーダーを見つめながら尋ねた。

「なんだ、マイク。」

同じく、シュレアもリーダーを見つめたまま返事をする。

「なんでUSNの偵察隊の我々にゼニスがあるんすか？OCU勢のメーカーが造った機体でしょう。」

「共通規格だから使えるだろう。」

「いえ、輸出そのものを行っていないはずです。どうやって手に入れたんですか？」

「入荷するパーツはライツに一任してるからな。」

「死の商人からも入手してるのですかね？」

「たぶんな。因みに彼の前歴に不審なところはないから安心しろ。」

「それならいいですよ。しかし、いいんすかね。仮にも正規軍なんですから。」

「きにするな。もう何年もすればウゝアンツアーに国境はなくなるさ。」

「そうですね。」

「偵察隊の名刺の裏側には実験部隊と書いておくか。」

「なるほど。実験部隊ですか。そう考えると、確かに敵のウゝアンツアーの性能を調べるにも、偵察隊は便利ですからね。」

それはいささか奇妙な出来事だった。任務を終えて戻る途中、ロクスタ砂漠を進行する三つの部隊の反応があった。その内、二つがU

SN、残りの一つはOCUの反応だった。識別反応は一つの部隊の正体を明らかにした。第三四四大隊一二特機中隊リンクス小隊。フリーダム強襲の際、補給部隊を救出し降下部隊の窮地を救った部隊だ。残りの部隊の情報は、常に最新の情報を持つ偵察隊ですら知らない正体不明の部隊だった。

「妙だな・・・」

「こちらタケシ。彼らはどうやら輸送隊のようです。あのルートだと、ちょうどラークバレーで交戦します。」

「リンクス小隊が向かっています!」

「なら、大丈夫か。・・・もう少し様子を観よう。」

OCUの部隊の反応もラークバレーに向かっていき、やがて二つの反応が重なる。しかし聞こえるはずの銃声は、いつになっても聞こえてこなかった。

偵察隊の面々は、スパイ同士の密会なのだと強引に決めつけた。それでは、どちらのスパイなのか? 偵察隊は動かず、そのままリーダーを見つめていた。

リンクス小隊の反応がラークバレーに入ると、密会(らしき行動を)していた両者は一斉にその場を離れた。OCUの部隊は西へ。リンクス小隊は東、不明な部隊は東南へ。

やがて三つの部隊の反応が消えると、偵察隊は基地へと帰投することにした。

「妙でしたね。」

「密会にしては奇妙だったな。」

「部隊の編成も妙でした。」

「大隊長に報告して・・・」

その瞬間、全ての機体のコンピュータが一斉に悲鳴をあげた。飛行物体接近! 飛行物体接近!

「どこからっ!」

「見ろよ、あれ。」

隊員達の見たものは、上空を走る大量の巡航ミサイルだった。それらは全てラークバレーの街に降り注いだ。偵察隊のウィアンツァーが、街を焼き尽くす業火の炎に照らされた。

ワタルは堪らずにウィアンツァーを駆けた。続けてニャン軍曹やレオン軍曹らが駆けていった。後を追うように全てのウィアンツァーが、破壊され燃え盛るラークバレーへと向かっていった。

第六話 ラークバレー（前書き）

受験勉強と失恋の痛みと執筆に追われるACESこと作者です。更新が滞ることもきつとありますが、多目に見てください！あと、感想もらえたらめっちゃくちゃ嬉しいです。

第六話 ラークバレー

街は完全に破壊されていた。

建造物のほとんどが原型を留めないほど破壊され、僅かに残った耐久力のある建造物からは炎が噴き出していた。

ウ、アンツァーでなければ近付くことすら出来ないことは、ウ、アンツァーのセンサーが表示する外気温の高さが雄弁に物語っていた。まるで人形のように道端に転がる住人の死体。流れ出た血が集まり、小河を形成していて、その行き先には巨大な血溜りがあった。真っ赤な水の泉には、何体かの死体が、あるものは沈み、あるものは浮き上がっていた。

街の道路にあるのは、ミサイルの直撃を受け破壊された車両と、人形のように横たわる住民の死体ばかりだった。動いているのは、猛威を振るう炎だけだった。

無駄だと分かっているながら、タケシは拡声器を使って呼び掛ける。

「誰か！生存者はいないのか！誰か！返事をしてくれ！」

ガンツという鈍い音が響き、シュレアは音がした方向、機体の右腕の肩のあたりをみる。そこには、ビルから落下してきた死体が体をくの字にして、ウ、アンツァーにぶら下がっていた。シュレアは死体の出処を探った。そして、機体の上、ウ、アンツァーよりも高い建造物の屋上に、助けを求める十数人の人々がいた。建造物は燃えていて、炎は建物を覆い尽している。しかし、助けることは出来なかった。その建物の屋上はウ、アンツァーよりも遥かに高い場所にあったからだ。

「レオン！いますぐにへりを呼べっ！このままでは皆焼け死ぬ！」
シュレアは激昂して叫んだ。

昔シュレアが少女であった頃。彼女の家に武装した強盗が入ってきた

た。ベッドの下、僅かに見える隙間から見た、両親の死様。すぐそこに居るのに、手をさしのべることができない。流れ出る血。

ラークバレーの惨劇は、シュレアの忌まわしい記憶をよびさました。だから、シュレアは冷静でいられなくなった。

「中尉！ヘリは出せないそうです！畜生が！助けを求める人がいるんだぞっ！」

「無線をこっちに繋げ！」

シュレアはヒステリックに怒鳴った。

しばらくして、シュレア機の無線機から声が聞こえてきた。

『何度も言わせなくてくれ、軍曹。ヘリは出せない。』

「こちらは偵察隊指揮官のシュレア中尉だ！命令だ！今すぐヘリをよこせ！」

『ですから、命令でヘリは出せないですよ！』

「そんな命令は無視しろ！今ラークバレーで助けを求める人々がいるんだぞ！」

『俺に言わないで下さい！』

「なら上官を呼べ！」

暫しの沈黙の後、別の声が無線から聞こえてきた。

『いい加減にしまえ。中尉。』

「人命救助を要請して何が悪い！」

「中尉……。もう、やめてください。」

「ワタルです。生存者、ゼロ……。確認。くそっ。」

屋上を見ると、既に助けを求める人々の姿はなく、ただの死体と化していた。

『分かってくれたか？中尉。無駄な……。』

「畜生が！」

シュレア中尉は我を忘れて無線機を殴り壊した。

ラークバレーの火災は、静まりつつあった。

シュレアの右手からは、血が滴っていた。

第七話 ロイド

「……くそっ。」

ワタルは今、フリーダムで謹慎という名の休暇を過ごしていた。市内のゲームセンターでしばし興じたあと、行くあてもなくさ迷い歩いていたのがほんの数分前。とあるバーに入ってウイスキーを注文すると、しばらく振りに鬱憤を晴らしていた。

ラークバレーの一件の後、シュレア中尉は指令部にいた、無線機で要請を固く拒否した上官を殴った。シュレア中尉は独房に入れられ、偵察隊の隊員は謹慎処分となった。戦況はというと、フリーダムから少し西側にあるロクスタ砂漠を境に両軍の睨み合いが続いている。

あれから一週間が経った今、暇を持てあまし酒に酔っている。

ワタルがウイスキーを飲んでいると、店に新しく客が入ってきた。一般人ではないようだ。細身の体からは想像もつかない鋭い目付きがそれを物語っている。

「いらっしやい。今日も勝ったな。」

「……ウイスキーを頼む。」

「ロイドさん。呑みすぎには御注意を。」

ロイドと呼ばれた男は出されたウイスキーを次々に飲み干していく。いつの間にか、ワタルはその男が持つ、独特のオーラに興味を抱いていた。

「マスター。彼は？」

「すみません。お客の私情は許可をいただかないと。」

「……俺は構わない。」

と、男がマスターの言葉を遮るように言った。

ワタルは彼に聞こえないように声を潜めたつもりだったのだが、彼には聞こえていたようだ。やはり、ただ者ではない。

「彼はロイドさん。昔はOCUの偵察隊の大尉をしていらっしやっ

た。今は闘技場のパイロットです。」

「ああ、なるほど。」

それを聞いて、ワタルはロイドの聴力や目付きの鋭さを納得した。

「なぜ退役したんですか？」

「それはあ。その。」

マスターが言いあぐねると、ロイドが自ら話した。既に酔いが回ってきたのだろう。

「婚約者を守ることが出来なかった。彼女は同じ部隊だったが、俺の前で乗機を破壊された。彼女が愛したこの島で俺はファイターになったんだ。」

「あの、すいません。大尉。その。興味本意でこんなこと聞いて。」ロイドは続ける。いつの間にか、独り言になってはいたが。

「あの部隊……。USNの部隊じゃなかった。あの黒いウァンツァーが、奴がカレンを！」

酒のせいだろう。ロイドは情緒不安定になっているようだ。しかし、ワタルが気になったのはその事ではなかった。カレン。その名を、一週間前に聞いた。あの、ラークバレーで。

一週間前。偵察隊の面々は、謎の部隊の動向を観察していた。偵察隊のウァンツァーには様々なバリエーションがある。ワタル機に試験的に搭載された無線機だけが、断片的に無線を傍受していた。

シュレア中尉に話そうと思ったが、帰還してから報告することにした。しかし、その機会は巡ってこなかった。「その名前をラークバレーで聞きました。」

「カレンを！いつ？」

「一週間前です。ラークバレーに現れた謎の部隊の無線でカレンという名前を聞き取りました。その部隊は輸送隊で、OCUの部隊と接触した様です。」

「それで！？カレンは？」

「それ以上の事は……」

「そうか……」

そう言うと、ロイドは下を向いてしまった。

「OCUか。」

しばらくして、ロイドは再び口を開いた。

「頼みがある。」ワタルがそれを受け取ると、ロイドは店を後にした。その時、ワタルはロイドが一言呟くのを聞いた。

「カレン。」

と。

ワタルはロイドから渡された一枚の紙を広げた。そこには、ロイドの連絡先が記されていた。

第八話 蒼いウ、アンツァー

ラークバレー壊滅から一ヶ月経って、ようやく偵察隊の謹慎が終わった。

戦況が変わったのだ。

ロクスタ砂漠を手中におさめたUSNだったが、グレイロックやペセタなどの都市から次々とOCUの部隊が攻めてきたのだ。また、空挺部隊や山岳装甲鉄道などによるウェイン山からの襲撃が相次ぎ、味方の被害が増え始めたからである。彼らに下った新たな任務は、ロクスタ砂漠の敵部隊の偵察だった。今回は第一小隊のみの任務で、第二、第三小隊はウェイン山の哨回任務についていた。

「中尉、やけに敵の数が多いですか？」

「ああ。密度はないが、かなりの反応があるな。」

「敵はフリーダムを奪還しようとしてるんすかね。」

「それは遅かれ早かれ来るだろう。問題は、タイミングだな。」

「陽動作戦ってことですかね？」

「さあな。長期戦を狙っているのかもな。」

「ところで、トッド軍曹はまだ見つからないんですよね？」

「ああ。フリーダムで撃墜された後、どこかの輸送部隊に拾われたらしいが、その後の足取りが掴めないらしい。」

「前任の隊長も撃墜された後、行方不明なんですよね。」

「そうだが、一体どうしたんだ？」

「他の部隊でも、行方不明の隊員がいます。共通点は、戦闘後に行方不明。そして、実力のあるウ、アンツァーパイロットなんです。」

「・・・続ける。」

「さらに、失踪に前後して所属不明の部隊の存在があります。その部隊のウ、アンツァーの一機は、決まって黒いウ、アンツァーなんです。これらの部隊が同一部隊である可能性は高いと思います。」

「それを他に話したか？」

「いいえ。ニャン曹長はどう思います？」

「お前のいいたい事は分かる。ただ、証拠がないじゃないか。証拠がなければ憶測の域を出ない。だが、証拠があれば全て繋がるな。理由は不明だけど。」

「確かに、理由は分からないな。兵士をさらって一体何になるんだろうな。」

「OCUの仕業かと思ったんですが、接触した部隊と別の方向、つまり東へと逃げたあたりOCUではないですからね。本当に謎ですよ。」

「USNでもOCUでもないとしたら、ハフマンの魂か。」

「ハフマンの魂？」

「隊長知らないんですか？」

「義勇軍か何かか？」

「テロリストですよ。」

「いや、正確に言えば義賊ですかね？」

「義賊？」

「義賊とも違うかもしれませんが、連中は民間施設を決して傷つけないんですよ。狙いは決まって軍の施設。それも、大して意味のない施設です。」

「特徴は、蒼いウ・アンツァーを駆ることですかね。あ、後、なぜかサカタインダストリーの施設は攻撃されますね。それも、軍と関係の深い施設。」

「まて。今蒼いウ・アンツァーと言ったか？」

「はい。」

シュレア機のカメラには、数機のウ・アンツァーが写りこんでいた。「三時の方向、蒼いウ・アンツァー一機とOCUのウ・アンツァー二機。」

ワタル機のカメラが同じ光景を捉えると、蒼いウ・アンツァーは東へと走り出した。どうやら蒼いウ・アンツァーは二機のウ・アンツ

アーに追い掛けられているようだ。

「どうします？どちらも倒しますか？」

「いや、蒼いウ、アンツアーがハフマンの魂なら、話が聞けるかもしれない。任務もハフマンの魂をどうしろというものじゃないからな。よし。ワタル。呼び掛けで蒼いウ、アンツアーを我々の方に誘導しろ。」

「はい。」

蒼いウ、アンツアーは二機のウ、アンツアーの攻撃を、地形を巧みに活かして回避している。銃器は装備するどころか、ジンクタイプの機体は武器らしい武器は何も装備していなかった。生身の人間なら軽く倒せようが、ウ、アンツアー相手ではあまり意味はないだろう。

『その蒼いウ、アンツアー。こちらUSNの偵察隊だ。もし生き残りたいのなら、我々の指示に従えっ！』

蒼いウ、アンツアーはワタルのウ、アンツアーにカメラを向けると、了承したのか、偵察隊に向けて右腕を振り上げた。

同時に偵察隊の三機のウ、アンツアーが戦闘体勢にはいった。OCUの部隊も反応し、二機のウ、アンツアーの狙いは蒼いウ、アンツアーから偵察隊の三機のウ、アンツアーに向けられた。シュレア中尉の機体がマシンガンの弾を避けようと左に機体を滑らすと、機体と思う以上に動かなかった。砂漠の砂に脚部のバランスが奪われたのだ。シュレア機がとっさにシールドを掲げると、マシンガンがシールドに命中する衝撃がシュレアを襲った。

「各機へ。砂に脚をとられてうまく動けない。注意しろ！」

シュレア機はショットガンで敵のウ、アンツアーの動きを止めながら叫んだ。敵機は機体を平行移動してそれを回避した。

「中尉。俺とワタルのゼニスなら大丈夫です。中尉は支援を！」

「すまない。」

シュレア機が後退を始めると、敵の一機のウ、アンツアーがそれを阻害すまいと執拗にバズーカを発射してきた。

着弾の度にシュレア機はシールドを掲げるが、その内の一発がシールドに直撃した。

シールドはバラバラに砕け、宙を舞った。

その瞬間、蒼いウ・アンツァーが側面から突然現れ、シュレア機への攻撃に集中していたウ・アンツァーが活動を停止した。敵のウ・アンツァーが砂漠の砂を巻き上げながら倒れるのと同じタイミングで、シュレア機の破壊されたシールドの破片が砂漠の砂に降り注いだ。シュレア機のシールドが砕ける一瞬の間に、蒼いウ・アンツァーの打撃機構が敵のウ・アンツァーを撃破したのだ。シュレアが一瞬の出来事に呆然としていると、蒼いウ・アンツァーのパイロットから叱咤の声が投げ掛けられた。

『ボーツとしてるな。死にたいのか!』

シュレアがハッと我に帰り、機体を後退させると、蒼いウ・アンツァーは残りのウ・アンツァーに近付いていった。

ワタルの機体がマシンガンで敵の動きを牽制したところに、ニャン機のロッドが敵のウ・アンツァーを襲った。敵のウ・アンツァーが倒れる直前に、蒼いウ・アンツァーがコックピットに打撃を加え、叩き潰した。

「こちらワタル。増援部隊は確認出来ません。」

「了解した。」

ニャン機は逃がす隙を与えぬように、蒼いウ・アンツァーの行く手を阻んだ。ワタル機、シュレア機もそれぞれ逃げ道を塞いだ。

『さあ、蒼いウ・アンツァーのパイロット。事情を聞かせて貰いたい。』

『どうやら逃がすつもりはないみたいだな。・・・わかった。今降りるから撃つなよ。助けてもらった礼もあるしな。』

数秒経って、ウ・アンツァーから一人の男が現れた。

「俺はゲンツ。ハフマンの魂のリーダーだ。」

第八話 蒼いウ・ァンツァー（後書き）

この作品の背景（下敷き）は筆者が調べあげたものです。しかし、誤りがあるかもしれません。『実際と違う！』ということがあれば教えてください。ただ、ゲームに出展しているキャラクター・部隊がこの小説に関わる（偵察隊と共演）する点はフィクションですから、悪しからず。長々とすいません！感想待ってまゝす！

第九話 ゲンツ（前書き）

サブタイトルにそれぞれ第四話、第九話と付けるのを忘れていました。以後、気を付けます。

第九話 ゲンツ

「ハフマンの魂のリーダーが、なぜ一人でこんなところにいるんだ？」

「調査をしていただけだ。」

「偵察か。」

「偵察というよりは探偵に近いな。」

「テロリストのリーダーが探偵でバイトでもしていたのか？」

「ははっ。その若いやつ。なかなかユーモアがあるじゃないか。」

「真面目に答えろ。」

「少し『調べもの』をしていた。」

「その、『調べもの』ってのは？」

ワタルが『調べもの』について聞いた瞬間、ゲンツの眼が鋭くワタルを睨みつけた。たった今ワタルの言葉に笑顔を見せた人物とは思えない、鋭い殺気だった。

「聞いてどうする！？」

「兵士をさらっているのは、やはりお前らか。」

シュレアが素晴らしい放った瞬間、ゲンツはキョトンとした顔になった。そしてすぐに自嘲的な笑みを浮かべた。

「残念だが、俺たちはしていない。犯人は、ニルバーナ機関とサカタインダストリイだ。」

「ニルバーナ機関？」

「ああ。」

「初めて聞く名だが、何者だ？」

「詳しくは分からない。だが、サカタインダストリイと関係の深い組織だ。」

「なぜ兵士を拐うんだ？」

「今、ウ、アンツァーを開発する企業は、より高い性能を求めてしのぎを削っている。サカタインダストリイはある手段を採用した。」

「新しい技術か？」

「・・・成人した人間の脳を使ったコンピューターを開発したんだ。」

「そのためにわざわざ人を拐っているのか？許される筈がない。」
「当たり前だ。俺が調べていたのはその証拠なんだがな。生憎発見されちゃった。」

「さっきのOCUの機体だな。」

「中々の腕を持っていたな。我々と同じくらい戦い慣れていたな。」
偵察隊の面々が先程破壊した二機のウゝアンツァーに目をやると、それらはまだ噴煙を上げていた。

「当然だ。連中はOCUじゃない。ニルバーナ機関直属のウゝアンツァー部隊だ。」

「そのニルバーナ機関の詳細はどうなってる。」

「・・・分からない。ただ、両軍の軍内部の中枢まで浸透している事。それから、奴らの使用するウゝアンツァーが特殊なものが多い。例えば、従来のウゝアンツァーよりめ巨大なウゝアンツァー。レイブンと呼ばれる、」

「黒いウゝアンツァー・・・？」

「そうだ。そいつが一枚、いや、黒幕かも知れない。ラーカス地区で度々目撃されていた。俺が調査に出向こうとした矢先の事だった。」

「・・・ラーカス事件！だとしたら、この戦争はサカティンダストリーの陰謀!？」

そこまで話したところで、複数のウゝアンツァーの反応が確認された。それらに統一した動きは見られなかった。軍隊ではないようだ。
「迎えがきたようだ。」

偵察隊のウゝアンツァーが戦闘体勢に入った。

「あんたら、俺たちが単なるテロリストじゃないって分かっているんだろ？その気があるなら、ソレイトにある環境保全の運動に参加しな。」

「環境保全？なんだそりゃ。」

「何をもって、知らなかったのか？ハフマンの魂は本当は環境保全団体だ。テロリストとの関係は否定してるがな。少し前までは両軍とも俺たちの攻撃目標だったんだぞ。」

「ゲンツさん。」

「なんだ、若いの。」

「ロイド・クライブと、カレン・ミューアについて調べて見てください。ただし、慎重に。」

「ロイドに、カレン。何者だ？」

「ラーカス事件に関係のある人物です。」

ハフマンの魂のウ、アンツァーの反応が消えたあと、残されたのは破壊されたウ、アンツァー二機と三機の偵察機だった。

そして偵察隊の面々は基地へと帰還した。

それら一部始終を、一人の記者がカメラに収めていた。偵察隊のウ、アンツァーが遠ざかるのを見届けた後、記者はその場を離れた。

第九話 ゲンツ（後書き）

今後、更新が滞ることもあるかもしれませんが、しかし、必ず完結させます。読者の皆さん、筆者の受験生という一身上の理由で長々と待たせるとは思いますが、今後ともよろしくお願いします。ACESでした。

第十話 襲撃（前書き）

更新遅くなりました。ですが、無事に春からは大学生として生きて行けそうです。これからは、早い段階でガンガン更新する予定です。では、本編どうぞ！

第十話 襲撃

砂漠のど真ん中にいたのはハフマン紛争の取材に来ていた記者だ。

「いい絵が撮れた。これならスクープになる。」

そう言って彼は砂漠用の偽装に用意したシートを返した。なかにあったのは、一台のラリーカーだった。鍵を挿し込み、車を走らせ、男はフリーダムへと向かって行った。

（ハフマンの魂とUSNの遭遇とは、ツイてる。これでランカスターに差をつけてやる。）

車は砂漠にある残骸の中を走っていた。そこかしこに破壊されたウェアンツァーや車両、あるいは武器弾薬が転がっている。

（随分前の戦闘痕だな、、、）

彼は、前方の残骸に違和感を憶えた。

（、、、動いた！？）

車のブレーキを掛けると、砂塵を巻き上げながら車は停止した。男はカメラを構える。が、その黒いウェアンツァーを見た瞬間、自分の失態を呪った。

（奴ら、待ち伏せしてた！？ちくしょっ、考えてみりゃ、こんなところにウェアンツァーがあるはずがないじゃいか！）

男は急いで車に乗り込み、車を走らせた。ふと目をやったバックミラーに写っていたのは、黒いウェアンツァーの右腕、ハサミを巨大化したようなそれが、車のあった場所に叩き付けられて砂塵を巻き散らしていた。

（ヤバイ、これはマズイ！せっかくのスクープなのに！）

次いでバックミラーに写っていたのは、黒いウェアンツァーが左腕を持ち上げ、装備していたマシンガンの銃口を車に向けるところだった。

（！よせよ。やめろ！）

マシンガンの発射される銃声が響く。同時に、黒いウェアンツァー

が車を追って走ってきた。男は車を蛇行させて、なんとかその攻撃を避けていた。しかし、そのうちの一発が車のすぐ脇に命中した。その衝撃で車から男は投げ出された。

（畜生！畜生畜生畜生！）

男はそのまま砂に叩きつけられた。幸いにも大したダメージは負っていない。しかし、それがこれから自分を待ち受ける運命を覆すことができないと、男は分かっていた。

（俺は、もう帰れないな。ごめんな。エレナ。父さん、あまりいい父親じゃなかったな。）

黒いウ、アンツァーのマシガンはひっくり返った車に弾丸を発射すると、数発で車は爆発、炎上した。黒いウ、アンツァーはマシンガンの銃口を男に向けた。

（エレナ。母さんと幸せに生きるんだ。父さんは）

一発の銃弾が思考回路を寸断し、男の思考はそれ以上進行することにはなかった。それでも、男の身体が原型を留めなくなるまで、銃弾は彼の体を引き裂いていた。

続けて既に炎上しているラリーカーに、再度鉛弾を浴びせた。炎の塊が四散し、完全に破壊され尽すまでそれは続けられた。黒いウ、アンツァーはそれを一瞥すると、その場を離れていった。

数十分後、黒いウ、アンツァーとは別のウ、アンツァーが数機現れた。彼らは手持ちのロケットやミサイル、バズーカでその残骸を跡形もなく吹き飛ばした。それが終わると、持参してきたコンテナから取り出した武器と交換し、その足で偵察隊の追跡のため進軍を開始した。

「隊長。先程の件ですが、どうしますか？」

ワタルは、機体をフリーダムに向けて移動させながらシュレアに聞いた。

「具体的に言え。」

シュレアはワタルの言葉を理解しながら、あえてそう言った。

「えっと、つまりサカタインダストリーの陰謀のことですよ。言及しないんですか？」

ワタルのこの質問は、シュレアにとって厳しい選択を強いることになった。シュレアの返答次第で、部下達の今後の人生を左右しかねないのだ。

「・・・証拠がない。」

これがもしシュレアがただの一兵卒であったなら迷うことなくサカタインダストリーの陰謀に立ち向かうだろう。しかし部隊の指揮官としての彼女はこの問題を否定した。

「そうだぞ。ワタル。サカタインダストリー製のウァンツァーの性能の良さは分かっているんだろ？軍がそれを捨てるとは考え難いし、そんな話まず信じないだろう。」

「連中は軍の中枢に入りこんでるってやつですか。」

「そんな状態でそんな大っぴらに事を起こしてみろ。」

「間違いなく私達は処分されるだろう。」

三機の偵察隊のウァンツァーが郊外の、まだ攻略戦の影響で無人地帯のエリアに差し掛かったときだった。市街地の外から、謎の攻撃を受けたのは。

最初の攻撃で、シュレアの乗機の左腕が失われた。その攻撃で、敵の腕の良さは窺い知ることが出来た。

「ちっ！」

シュレアは舌打ちすると、機体を敵の射線を遮る様な位置にあるビルの陰に機体を移動させた。

「八時の方向にウァンツァー！機数三！」

「こちらはU S Nの部隊だ！貴隊はどここの所属だ！？」

返答は、新たに発射された弾で行われた。

「応答なし、か。」

「第二小队、第三小队の到着まで数分です！」

「耐えられるか、？？」

敵の一機はライフルを装備していることはシュレア機の左腕が一撃で破壊されたことからわかる。しかし、残りの二機の兵装は不明だった。

「ニャンは左翼、ワタルは右翼につけ。」

「隊長、後退して下さい！」

「いや、奴らの腕が良すぎて後退は無理ですよ。」

「ああ。突破するしかない！」

ワタルは機体をシュレア機の右方向へと駆ると、各センサーに注意を払いながら索敵を行った。偵察隊のウ・アンツァーには任務の特性上、新型の装備が各機体に試験的に搭載される。ワタルの場合、センサーやレーダーなどの電子機器が新型の場合が多い。ラークバレーの際、ワタル機だけが無線を傍受したのもその為だ。今回も、たまたま搭載された広域レーダーの試作品が敵を捉えた。

「右に一機。正面にライフル野郎、左にランチャーです。ライフル野郎は動きません。」

「分かった。」

センサーにはワタル機に近づく敵のウ・アンツァーが最も濃く表示されている。その移動速度の速さからして、ローラーダッシュをしているのは明らかだ。

（よし。奴があのだから姿を見せたときがチャンスだ。）

ワタルはマシンガンの残弾数が十分にあることを確認してから、トリガーに指を架けた。

（まだだ、、まだまだ、、もう少し、、まだ、、今だ！）

ワタルがトリガーを引くと、眩いフラッシュバックと共に無数の弾丸がビルに向けて発射された。

それらがひっそりと佇むビルに突き刺さろうかという瞬間、敵の機体がローラーダッシュの勢いを殺すことが出来ず、弾丸の雨の中に踊り出た。

全身にマシンガンの弾を受けたウ・アンツァーは、なんとか反撃をしようと右腕に装備していたショットガンを持ち上げた。しかし、

次々と襲いかかる弾丸がそれを阻止した。弾は機体に突き刺さり、貫通し、あるいは跳弾した。やがて、耐えきれなくなった装甲が破壊され、機体のあらゆる場所から炎が噴き出した。その機体が仁王立ちのまま爆発するのを確認すると、ワタルはトリガーから指を離した。

「一機撃墜。」

「敵の動きに変化は？」

「ライフル野郎は動きません。ランチャーは、ニャン軍曹の前に出ます！」

「任せろ。」

ニャン機がパイルバンカーを構えたときだった。ビルの陰からミサイルが飛来してきた。ミサイルはまるで意思を持っているかのように軽々と障害物を避けていた。そしてそのミサイルはシュレア機に接近していった。シュレア機の放ったショットガンの散弾がミサイルの一つを撃墜したが依然として複数のミサイルがシュレア機に近付いた。

（ああ、私は死ぬんだな。）

シュレアが死を覚悟すると、機体が爆炎に包まれた。

（痛みってないんだな。父さん、母さん、今から逝くからね。）

「ワタル！」

ニャン軍曹の声にシュレアが目を開けると、そこはまだあの世ではなかった。シュレアは何が起きたのか分からなかった。ウ、アンツァーのカメラに写っていたのは、両腕を失い、倒れたまま動かないワタル機だった。ワタルはミサイルがシュレア機に命中する直前に、ミサイルとシュレア機の間割り込み、かばったのだ。

ニャンがミサイルの飛来してきたビルに向かうと、敵のランチャーは再度シュレア機に向けて機体を発射体勢にしていた。

マシンガンを連射しながらパイルバンカーを構え、強襲する。敵のウ、アンツァーはニャンに気付き発射体勢を解除した。

敵機がニャン機に向き直り、ボディ（ウ、アンツァー）における頭から腰までの部分）の防御用機関砲を発射し始めた。

しかし、敵のパイロットは近接戦闘に明るくないようで、発射された弾は明後日の方向に消えていった。

ニャンはそのまま勢いを緩めることなく接近し、ボディの機関砲にパイルバンカーを打ち込んだ。銃身に巨大な針を打ち込まれ、機関砲は暴発した。敵の機体は暴発の衝撃で大きくのけぞった。そこへ、ニャンは敵のミサイルに向けてマシンガン撃った。数発の銃弾が弾頭に直撃、誘爆が連鎖した。もちろん機体が無事でいられるはずもなく、脚部を残し跡形もなく吹き飛んだ。

「隊長。クソランチャー野郎は倒しました。ライフル野郎は撤退。

ワタルはどうなりました!？」

シュレアは機体を降りて、ワタル機に駆け寄る。まだ熱を帯びた機体から、コックピット内にいたワタルを引きずり出した。

「ワタル! しっかりしろ!」

ワタルの体にミサイルの破片が突き刺さり、そこから、決して少ない血液が流れ始めた。

ライフルを持ったウ、アンツァーが、市街地を抜けようとしたときだった。何かに脚を撃ち抜かれ、機体が転倒した。

（追っ手か? くそっ!）

そこに現れたのは、黒いウ、アンツァーだった。「ど、ドリスコル中尉! 敵が潜んでいます!」

「その心配は要らない。お前はマテリアル候補から外れた。」

次の瞬間、黒いウ、アンツァー、レイブンのハサミの様な巨大な左腕が振り降ろされた。その一撃で、パイロットは機体もろともバラバラに砕け散った。ドリスコルは部下に処理を命じると、早々と去っていった。

「ワタル! しっかりしろ!」

「た、隊長。敵は?」

「逃がした。今はお前の手当てが先だからだ。」

「おい、ワタル。喋るなよ！」

「ぐっ！」

シュレアとニャンが自分の手当てを行っている姿を見て、ワタルは意識を失った。

「ドリスコル中尉。連中の始末はどうしますか？」

「新たなマテリアル候補にあげておけ。」

第十一話 病室

ワタルが目を覚ましたのは、ニルバーナ機関所属とおもわれるウ、アンツァー部隊との戦闘から二日経った朝だった。ワタルが見たのは天井と点滴液の入ったパックだった。瞬きをすると、ニャンとシユレア、タケシの三人が顔を覗き込んできた。

「大丈夫か？」

心配そうに、シユレアが聞いてきた。

「、、か、は」

ワタルは声を出そうとしたが、うまく出なかった。

「無理しなくて良い。生きてるのが奇跡に近いんだ。」

「ああ。まさか中尉のことを救うとは思わなかった。それも、体を盾にしてな。」

「手は動かせる筈だ。言いたいことがあればこの電子手帳に書き込め。」

シユレアの手には、掌ほどのサイズの電子手帳が握られていた。ワタルはそれをうまく動かない両腕で掴むと、早速質問を書き込んだ。

【治るまでどのくらいかかりますか？】

「全治半年だ。リハビリを入れれば丁度十ヶ月くらいだ。」

【ウ、アンツァーに乗れますか？】

「心配ない。幸い臓器は大したダメージを受けていない。」

【壊れない程度に、ですネ。】

「お前、怪我してんだから皮肉くらい控えろよ。訓練教官にも言われたじゃないか。『素直でいればいいものを！』って。」

【ニルバーナ機関について進展は？】

「残念ながら、特にないな。そもそも、真実かどうか分からないだろう。」

「あれ、ワタル、お前ニルバーナ機関知ってるのか？」

タケルがそう言うとしユレアとニヤンの顔色が変わった。

「どういうことだ？」

シュレアは聞き返した。

「あ、じゃあみんなのところには来てないのか。この間の謹慎中に俺、闘技場で時間潰してたんだ。三連勝くらいしたら、見たことない奴がスカウトしてきたんだ。ニルバーナ機関だって言ってたな。イーヒンとか言うファイターは付いて行ったみたいだけど、俺は断りました。」

「それで、何か言ってなかったか？」 「いや、俺が知りたいくらいですよ。」

「そうか。」

ワタルが次の質問をしようとしたときだった。病室の電話が呼び出し音を発した。シュレアが受話器をとり、暫くして通話が終わった。

「任務だ。戻るぞ。ではワタル、またな。」

三人が素早く部屋を出ていくと、ワタルは悔しくなった。部隊のメンバーが前線で戦いに行くのに、自分だけ動けないことが悔しかった。

「失礼しまーす。」

扉が開き、赤いセミロングの髪型をしたナースが入ってきた。

「ああ、目が覚めたんですね。」

ナースは少なくなった点滴を交換しながら言った。

「しばらくは体がうまく動きませんが、すぐに歩くくらいは出来るようになりますよ。ただし、臓器が完全な状態になるまで、半年ですからね。それまでは車椅子で我慢して下さい。」

ワタルは電子手帳に書き込んだ。

【早く戦線復帰したい。】

「いけません。完治するまで、訓練は一切実施しません。、、、もう。男の人ってみんなそうなんだから。いいですか？これからしばらくは私なしでの行動は許しません。ナースコールの隣にあるボタンを押せば、私は来ますから。」

【つきつきりかい？】

「実家のラークバレーが壊滅したから、この病院で暮らしてるんですよ。さあ、まだまだ会話が出来る体じゃないんです。眠ってください。」

【あなたの名前は？】

「アタシはニナです。」

しばらく物思いに耽っていたワタルだが、いつしか深い眠りに就いていた。

ワタルが再び眼を開けると、ニナがまた新たに点滴を追加していた。そして脇にいたのが、一般のウ・アンツァーパイロットとは違うパイロットスーツに身を包んだ兵士だった。

「あ、目覚めたみたいです。ただし、」

「短い間に済ませるよ。」

ニナはワタルに電子手帳を握らせ、退室した。

「ワタルと言ったか。私はバーゲストという対テロ部隊に所属しているミハイルという者だ。早速で悪いが本題に入らせてもらう。」
有無を言わせぬ口調で、ミハイルという男は続けた。

「君が交戦した部隊は、我がU S Nの部隊ではないがしかし、パイロットはU S N所属のパイロットだ。機体は民間企業から仕入れたのか、身元がわからん。」

ミハイルは病室のブラインドを開け、続けた。

「始めはハフマンの魂の連中かと考えた。だが、つじつまが合わない。民間の施設に手を出さない連中が、無人地帯とはいえ、市街で戦闘を行うとは考えにくい。では、O C U？それも違う。敵さんはフリーダム奪還のために、たったの数機で攻めてくるほど間抜けではないだろう。もちろん、そうであれば良いがね。」

【遊撃隊では？】

「その説が最も有力だ。だが、我々はこう考えている。最近兵士の失踪が相次いでいるのはその部隊が関係しているのではないかと。そして、ハフマンの魂は彼等を狙っている。」

ミハイルは一呼吸置いた。

「サカタインダストリーの工場付近で、謎の部隊が目撃された。そして目撃情報にはウ、ァンツァー。そう。君が先日の戦闘で撃破した機体と一致したんだ。」

ミハイルはワタルに向き直った。

「結論はまだ出ない。だが、君は何も考えずに居てくれ。今はな、
、長くなった。また機会があれば会いに来る。」

ミハイルはそう言い終わると、病室を後にした。

ワタルはとにかく早く戦線に復帰したかったが、少しでも無理をしようとするとなナの叱咤が飛んでくる。

「こら！ワタルさん！まだ立っちゃ駄目ですって！」

「ううっ。」

「でも、声はだんだん出てきましたね。よかったですね。」

「ニナ、さん。」

「はい？」

「腹、、減った。売、、店、行こう」

「あ、今日はあたしが奢りますよ。」「ど、して？」

「今日はあたしがこの島に入植して一年経った記念日ですから！まあ、ラークバレーがないのが残念ですけど。仕方ありませんし。」

「ニャン！左翼に敵の戦車だ！気を付けろ！」

ウェイン山では、長い間小競り合いが続いていた。依然としてUSNが優勢を保ってはいるが決して油断できる戦況ではなかった。

「任せてください！」

タケシ機の放ったロケットが敵の戦車で炸裂し、戦車は鉄の棺桶と化した。

第二次ハフマン紛争は泥沼化した。この状況が大きく変わるのは、

十ヶ月後。OCUの傭兵部隊、キャニオンクロウが結成された。
だった。

第十二話 半年後 結成

「よし。包囲しろ！」

今、メール河の支流の一ヶ所で二機のウゝアンツァーを取り囲んだ。青いカラーリングと緑のカラーリングを施している。

「たったの二機で迂濶に進軍してきやがって。」

そこへ、上空を通過する輸送機があった。その輸送機から、三機のウゝアンツァーが降下してきた。

「隊長！敵の増援です！」

しかし、敵のウゝアンツァーは全部で五機。こちらは八機。実戦経験豊富な我が隊の敵ではない。

「怯むな。増援が来てもたかだか五機だ！」

USN軍遊撃隊の隊長である彼から見て、左翼に青と緑のウゝアンツァー。正面に白いカラーリングと灰色のカラーリング、赤いカラーリングの機体がいる。左の戦線で、爆発が起きた。

（これで残り四機。）

次いで正面の一番奥で爆発。

（三機。）

同じく正面で二つ、左で一つ爆発した。

（全滅したか？）

更に、左で爆発した。

（何機やられた？、、敵の数が減っていない！？）

彼がモニターを見ている間に、部下の反応がまた一つ消えた。つまり、残ったのは二機。敵は五機とも健在ということだ。

「隊長、撤退、うわっ！」

左に展開していた、副官を勤めていた部下の機体が突如爆発した。次の瞬間、彼の正面から、敵のウゝアンツァーが現れた。白いウゝアンツァー。どうやら隊長機のようなだ。

マシンガンのトリガーを引く。弾丸が発射された瞬間には、白いウ
ェンツァーは消えていた。

「どこに!？」

そこで、彼は自分の犯したミスを呪った。白いウェンツァーを狙
っている間に、他の四機に囲まれていた。灰色と緑色のウェンツ
ァーの装備したライフルが火を噴き、両腕が破壊された。両腕が破
壊されたのと同時に白と赤のウェンツァーが放ったマシンガンが
致命傷を与えた。両脚が破壊されたのだ。

「ばかな! OCUのウェンツァーがこれほどまで強いとは!」
次の瞬間には、青いウェンツァーの発射したロケットがコックピ
ットに直撃した。炎を吐き出すコックピット内で彼が最期に見たも
のは、溪谷を翔ぶカラスのエンブレムだった。

「ワタルさん。退院おめでとうございます。もう戻って来ちゃ駄目
ですよ?」

「今度来るときはニナみたいにいるさくない人がついてくれたらいい
なあ。」

「ど、どういう意味ですか!」

「そういう意味だよ。」

「戻って来たらまたビシバシ言ってやるんだから!」

「ニナ。」

ニナは、急に真面目な顔をしたワタルに少し驚きながら、顔を見た。

「ありがとう。また、戦争終わったら会いに来る。」

「えっ、、うん。でも、急患で再会は無しだよ。」

「そうだね。ちゃんとした形で。」

「ワタルさん。元気でね。」

「ニナも。」

偵察隊の格納庫では、ワタルの為の新しい機体のロールアウトが行われていた。

「なあ。タケシ。」

「はい？」

「今日はワタルが退院する日だろ。迎えには行かなくていいのか？」

「せっかくのチャンスを邪魔しちゃ悪いじゃないですか。」

「チャンス？」

「そうですね。あの二人、惹かれあってるのに、当の二人は気付いてないんですから。」

「残念ながら、余計な世話だったみたいだな。」

「えっ？」

タケシの後ろには、袖から傷痕を覗かせ、微笑むワタルがいた。

「お前、変な気使うと良いことないくせに。邪魔しちゃ悪い？」

「好きなんだろう？彼女のこと。」

「さあな。隊長は？」

「隊長なら、今はライツ主任を尋問してる。」

「尋問？何でまた？」

「お前の新しい機体のことだな。」

「なぜ主任の調達する機体はOCUの機体も含まれているんですか！」

「ですから、俺は性能の良い機体を集めているだけですよ！」

「そうじゃなくて、その入手経路を話して欲しいんだ。でないと、あなたにスパイ容疑が懸けられるぞ。」

「民間の販売業界から購入しています。民間の業者は節操なくパーツを輸入できますから。主にルーピデイスの業者を介しています。」

「、、、わかった。」

シュレアとライツの尋問が終わったとき、ちょうどワタルが入室してきた。

「ワタルです。原隊復帰しました！」

「おう！ワタル！よくも俺たちの整備した機体を壊しやがったなあ！」

「待ってくれ、主任！あれは中尉を守る為に」

「あの最新型を手に入れるのにどれだけ苦労したと思ってんだ？」

「まあまあ、主任。データは残っているわけだし。」

「データは残して万事OKって訳にはいかねえ。機体は壊れたんだ。」

「仕方ないじゃないですか。」

「ライツ主任の剣幕に、シュレアもワタルもタジタジだ。」

「俺の可愛いウ、アンツァーだぞ！？あんなに頑張って手に入れて、あんなに頑張って整備した機体を壊しやがって、、、。」

「す、すいません。」

「すまなかった。」

「ライツのその勢いに、なぜかシュレアも謝る。」

「罰として、お前にはこれからずっと試作品に乗ってもらうぞ。これ以上撃墜させる訳にはいかないからな。」

「ワタルはライツの顔を見て言った。」

「それって、、、」

「最新型に乗せてやるって言うてるんだ。お前はウ、アンツァーを操る天才だ。最新型に乗ってこそ実力を発揮出来る。」

「ありがとうございます！」

「給料分の働きをして一人前、完璧に仕事を全うして一流なんだよ。」

「ワタルは早速最新型の機体に搭乗した。システムを起動すると、コックピット内が各センサーの光で照らされた。」

「ワタル。そいつは本当に最新型なんだからな。試作とは言え、前にお前が乗ってたゼニスの後継機だ。いうなれば、ゼニスXだ。」
「ゼニスX、、、。」

第十三話 遊撃（前書き）

更新滞ってすいません。

第十三話 遊撃

フリーダムの作戦指令部では、次々と最新の情報が流れ込んでいた。そのほとんどが、OCUの反攻作戦に関するものだ。

作戦参謀や情報担当の士官はそれらを元に作戦を考案する。

「連中の狙いはフリーダムのようだな。しかし、これだけの部隊をよくも集めたもんだ。」

「再編されたのはつい最近のようです。」

「なぜ最近になって我が軍の部隊が撃破されるようになったんだ？」

「それについては、二つ解答が出ています。一つは、敵のパイロットの質が上がったこと。まあ、ウ・アンツァーの性能も向上しているのも事実ですけど。それで、二つめが我々にとって重要視されています。」

「新兵器でも出たか？」

「いえ。傭兵部隊です。」

「たかだか傭兵風情にやられているのか。だとしたら、やられたのはよっぽど間抜けな部隊に違いない。」

「残念ながら、やられたのは精鋭部隊とまでは行かないものの、優秀な部隊ばかりです。」

「、、その部隊の詳細は？」

「そこまでは、、。傭兵部隊ということ以外、情報は入ってきていません。なにせ、交戦した部隊は全て壊滅してますから。」

こうして、情報部の将官・士官達は頭を抱えることとなった。

ワタル達偵察隊は、新しく再編された機動中隊所属の偵察隊に任命された。前の部隊は少なからず損害を受けたために、新たに再編されることになったのだ。

前にいた部隊よりも、偵察隊は自由に動くことも認められた。

それは偵察隊というよりも、独立した遊撃部隊と言えるものだった。

一応偵察隊として扱われるため、任務は全て周辺の偵察や警戒だった。

しかし、現状の任務は遊撃隊のそれと同じものだった。

彼らに与えられた任務は、フリーダムを取り囲むように配置された対空ミサイル部隊の護衛だった。護衛とは言え、通常の部隊がミサイル部隊の周囲を警戒。偵察隊だけは、二つのミサイル部隊の中間地点での待機が別命で下された。万が一攻撃された場合に、攻撃された部隊の予備兵力としてその機動力を活かす為だ。

「最近、敵の部隊が活発に動いているそうだ。特に、この界限がな。」

マイクは周辺を警戒しながら、キッドと会話をしていた。

「でも、一度も突破されていないんですね。」

「傭兵の俺から言わせてもらえば、こんなに大勢で対空ミサイル部隊を守らせる上層部は馬鹿野郎だな。」

「なぜ？」

「敵に位置を教えているじゃないか。」

「大部隊を投入して攻撃させる気無くさせるつもりでは？」

「あのなあ。ミサイル車両もウ・アンツァーもパイロットも無限じゃないんだ。例えばゲリラ的にミサイル車両だけ狙われてみる。ミサイル車両を失えば、それだけ防空網に穴が空くんだ。さらに、ミサイル車両を失った部隊は他の部隊に組み込まれたりするだろう。警戒の密度が薄くなると、敵は簡単に奥深く進入できる。まあ、挙げればまだまだあるがきりがない。」

「つまり、スマートなやり方ではないと？」

「俺なら、ミサイル車両は決して発見されないように偽装しておく。それから偽物の車両部隊にもっともらしく護衛部隊をつける。」

「なるほど。マイク軍曹の戦略眼には舌を巻きますよ。でも、傭兵部隊やゲリラならともかく、正規軍はそういう地味な行動よりもわりと派手な配置を好みますよね。」

「まあ、俺はただのパイロットだからな。外れることの方が多い。」

あまり、気にしないでくれ。しかしな、キッド。地味ってことはないだろうよ。」

「ワタル、最新型の調子はどうだ？」

「凄いですよ。出力が今までの比じゃない。早く実戦で慣らしてみたいです。」

「お、ワタル。実戦テストが近付いてるみたいだ。こちらタケシ。敵部隊キャッチ。左翼に展開した部隊に接近しています。」

「よし。じゃあ、第一小隊だけで左翼の支援にまわる。他は引き続き待機。何かあったらレオンの指示に従って行動。以上だ。」

シュレア機が交戦しているミサイル部隊へと向けて機体を移動させると、第一小隊のウ、アンツァーがそれに続いた。

ミサイル車両の護衛部隊は、突如出現した敵に奇襲され混乱し、瞬く間にウ、アンツァー同士の混戦になった。

護衛部隊の的確な指示を受けることなくなったミサイル車両は独自の判断で後退を始めた。幸いにも、今の段階でミサイル車両部隊に被害はない。一方ウ、アンツァー同士の戦況はファイファイファイのようだ。USNのウ、アンツァーが、敵のウ、アンツァーを撃破すると、今度は別の敵がUSNのウ、アンツァーを撃墜した。その時になって、ようやく偵察隊のウ、アンツァーが到着した。

「車両部隊へ！東にある林に身を隠せ！ワタル。ニヤン。ニック。タケシ。準備はいいな？」

「はい！」

「よし。火災現場に突入するぞ！」

護衛部隊隊長のケリー小尉は優秀な士官だった。

ウ、アンツァーの操縦、とりわけ中距離戦闘ではあの地獄の壁の副官、デイブ・スターリング中尉に優るとも劣らない実力の持ち主だ。この戦闘だけで既に三機のウ、アンツァーを撃墜している彼だが、

いつもなぜか不運に恵まれることでも有名だった。今回の護衛任務に際して新しく補充兵としてやってきた部下はろくな訓練をしていないせいなのか、或いは初めての实战で物怖じしたのか数で優位に立っているにも関わらず次々と撃墜された。前回の警戒任務でも、情報部のミスで味方は彼を除いて全滅していた。

「ちくしょう！なんでこんなにツイてないんだ。」

彼は悪態を吐きながら、さらに鋭くウ、アンツァーを駆った。

ワタルが敵と交戦してまず思ったのは、開戦当時に比べて敵のウ、アンツァーの腕がよくなっているということだった。

「奴らも腕を上げてきてますね。注意してください。」

次に、ゼニスXの動きの良さだった。

（すげえ！なんて軽快なんだろう！）

護衛部隊の隊長機を背後から狙う敵機に向けてマシンガンを発射した。ワタルの予想よりも遥かに命中率が上がった腕は、無駄なく反動を吸収している。発射された弾は見事な集弾率でウ、アンツァーを貫き、機能を停止させた。

「護衛部隊隊長機！応答せよ！」

「・・・、こちら護衛部隊隊長ケリー小尉。」

「我々と共同戦線を構築しましょう！」

「了解、生き残った機は遊撃隊と合流するぞ。損傷の激しい機体はミサイル車両の直衛につけ。」

ニック軍曹の放ったミサイルが、損傷の激しい機体を狙う敵機を撃破した。それを機に、護衛部隊と偵察隊は距離を縮める。

ケリー小尉は随分と久しぶりに自分にツキが回ってきたと思った。

「逃がさん。」

そして彼の発射したライフルの弾は見事に敵機のコックピットを貫いた。次の敵を探すために目をやったセンサーに、敵の反応はなかった。

「こちら護衛部隊。助かった。支援感謝する。」

「こちら偵察隊長シュレア中尉。貴隊は消耗がはげしい。他の部隊と交替してくれ。それまでは我々で護衛を引き継ぐ。」

「了解しました。中尉。全機。帰投するぞ。」

「いやあ、助かった。こちら対空車両部隊隊長ミケルソン特務中尉だ。あんたらの援護、感謝する。」

「いえ。」

「俺達はイザって時の為にウァンツァーを用意している。最初の奇襲でパイロットは死んだんだが、あんたら自由に使ってくれ。最近出回ったばかりの代物もあるぜ。特に紹介したいのは、新しく開発されたウァンツァー用のバルカンと新型のロケットランチャーだ。」

「しかし、我々に使わせていいのですか？」

「気にするな。護衛部隊の装備を充実させただけさ。免責は請けるまい。」

この思わぬ収獲から二時間後、交替に現れた部隊に任務を引き継ぐと偵察隊は基地へと帰還した。なお、彼らの装備する新型の部装をみて、ライツ主任が狂喜乱舞したのは言うまでもない。

第十四話 反攻開始

「街が、、襲われてる！」

隊員の一人が、叫んだ。街には、多数のUSN軍機が入り込んでいた。

「あなたたちオシアナ連合の部隊でしょう、援護してください！」
そうやってきたのは、一機のウ・アンツアーのパイロットだった。
どうやら、駐留部隊の生き残りらしい。その直後には、装備したミサイルランチャーを発射していた。

「隊長、これは命令違反です。帰還しましょう。」

副官の女性中尉が命令違反を戒めたが、皆口々に違反を肯定した。
金が入ればそれでいいという者や、街を救おうとする者、部隊に同行している従軍記者に至ってはスクープが撮れるという事に執着して、聞く耳すら持っていない。

そして、傭兵部隊隊長、ロイド・クライブもまた、この場を見捨てる訳にはいかなかった。

（あの病院に、カレンが居るかも知れない。）

「全機、前進！敵部隊を殲滅する！」

一両の輸送車が、グレイロック市立総合病院の前に停車した。

「配置に付きました！」

「よし。マテリアルの搬入急げ。私は少し運動をしてくる。」

そう言うと、グレイロックの市街に潜んでいた黒いウ・アンツアーが動き出した。

ロイドが敵のアサルトを撃墜した時、ビルの間から見覚えのある機体が姿を見せた。しかし、ロイドが瞬きをする間には姿を消していた。

（黒いウ・アンツアー、、？）

もう一度目を凝らして辺りを見回すが黒いウゝアンツアーの姿は見られなかった。

(気のせいかな、？)

「おお、、、ジーザス、、、、」

彼の背後で、生き残りのウゝアンツアーが撃墜された。パイロットは爆発寸前での脱出に成功していた。

「隊長、マテリアルの積み込み完了しました！」

「そうか。では、そろそろ証拠を消すことにしよう。」

黒いウゝアンツアーのパイロット、ドリスコル中尉の合図で、グレイロック市立総合病院は巨大な爆発と共に炎に包まれた。

対空ミサイル車両の護衛任務から戻って一息ついたその時、ハフマン島のローカルテレビのニュースが流れていた。

『詳しい事は不明ですが、グレイロックの街がUSNの部隊の攻撃を受け、多数の死傷者が出た模様です。ご覧になられるでしょうか！病院が燃えています！まるであの病院を狙ったかのように、病院だけが燃えています。USNの部隊を撃退したOCUのウゝアンツアーも、消火活動をただ見ていることしか出来ません。今入ってきた情報によりますと、彼らはOCUの傭兵部隊のようです。正規軍は大規模な移動を行っており、僅かに残った部隊は壊滅した模様です。目撃者の証言を・・・すいません！この状況について何か知りませんか？』

『わからない！ああ。あっちにも瓦礫に埋まった人が！』

『誰か目撃者は？』

『ウゝアンツアーよりもデカイ、黒いウゝアンツアーが病院を破壊していった！USN野郎は皆くたばればいいんだ！』

第一小隊の面々は、その言葉に戦慄した。

「黒い、、ウゝアンツアー。」

黒いウ、アンツァーという単語と破壊された病院が繋がれば、きつとまた恐ろしいことが行われたのだろう。

気付けば、ワタルの背中汗で濡れていた。予想が当たっていれば、再びニルバーナ機関が浮上する。戦闘の恐怖をも凌駕する恐怖が、偵察隊の思考力を停止させていた。

「まったく、なんでこんなギリギリのタイミングで攻撃しなきゃいけないんだ？」

「先に攻撃したら攻撃機のコースがバレてしまうじゃないか。」
OCUの傭兵部隊、キャニオンクロウはフリーダム奪還作戦の直前、つまり今になってようやく作戦に参加していた。任務はフリーダムを取り囲むように配置された対空ミサイル車両の全破壊だった。キャニオンクロウの攻撃する部隊は、先程シュレア率いる偵察隊が交戦した場所の反対側だった。つまり、ミケルソン中尉率いる部隊に隣接する部隊だった。

「全機、前進！ ナタリーら数名で、護衛の手薄な森の左にある車両を攻撃。サカタら数名が右の林を迂回して、残りの全機は正面の防衛部隊を強襲、サカタらとこれを狭撃する！」

キャニオンクロウの隊員は、ウ、アンツァーを駆った。森の左では、赤いカラーリングを施したウ、アンツァーを中心に。正面ではロイドの操る白いウ、アンツァーを中心に、その右側では灰色のウ、アンツァーを先頭にそれぞれ進軍を始めた。

「敵襲だ。遊撃隊に支援要請。護衛のウ、アンツァー部隊、よろしく頼む。こっちは空の敵しか狙えない。敵攻撃機の通過まで、我々を守りきってくれ！」

「任せろ。きっちり発射まで守ってやる。よし。アサルト班は前衛につけ。ランチャー班は援護。新米はそれぞれ車両を守れ。敵攻撃機通過まで、敵を近付けさせるな！ 遊撃隊が到着するまで、敵の撃退に専念するんだ。」

護衛部隊のウ、アンツァーは見事な動きで配置に付いた。

程なく、敵のウ、アンツァーがランチャー班の射程距離まで接近してきた。ランチャー班は接近する白いウ、アンツァーに向けてミサイルランチャーを発射した。発射された弾頭は、白い尾を曳きながら目標の白いウ、アンツァーに向けて加速した。白いウ、アンツァーは怯む事なくローラーダッシュで接近してくる。

「命知らずの馬鹿め！墜ちろ！」

しかし、ミサイルの群れはウ、アンツァーに命中することなく撃墜された。突撃を敢行した白いウ、アンツァーの背後に、マシンガン、あるいはショットガンから煙を揺らせている何機かのウ、アンツァーがいた。信じ難いことに、発射されたミサイルを全て銃によって撃墜したのだ。

「何！もう一、一、」

ランチャー班の班長がそれ以上命令を発することはなかった。突撃してきた白いウ、アンツァーが、班長の機体を破壊したのだ。白いウ、アンツァーは敵陣の真ん中を駆けていく。白いウ、アンツァーを仕留めようと発射されたアサルトライフルの弾が、反対側にいた友軍機の左腕を破壊した。

（攻撃すれば、味方に当たる。ならば！）

「散開するんだ！味方に当たる！」

指示通り散開した部隊だったが、側面から突然灰色のウ、アンツァーが現れた。

（迂回してやがった！？）

機体を翻し、敵の別働隊に向き合った瞬間には彼は引き金を引いていた。発射されたマシンガンの弾は扇状に発射され、灰色のウ、アンツァーに向けて火を噴こうかという瞬間、彼の思考は灰色のウ、アンツァーの発射したライフルの弾丸により寸断された。

「一機撃墜！」

部隊員のサカタの報告と同時に、敵部隊の動きが乱れた。どうやらサカタが撃墜したのは隊長機だったようだ。

「隊長。左翼のウ・アンツァー、及び対空ミサイル車両の破壊が済みました。続けてそちらの援護に向かいます。」

「わかった。」

「ロイド、敵の遊撃隊が接近しているぞ。到着までには済ませよう。」

「そうしよう。全機、敵の遊撃隊の到着前に片付けるぞ！」

ロイドの発射したライフルの弾が、敵のウ・アンツァーの脚を破壊した。

「よし！車両は全部壊したぞ！」

「わかった。引き続き、残存兵力を叩く。」

（何でだ？俺たちは死ぬほど努力してここまで辿り着いたのに。なんでOCUの雑魚に負けなきゃならないんだ！）

彼の隣でマシンガンを発射していた機が身じろぎ、仰向けに倒れた。直後、機体のボディから炎が噴き出し、爆発した。

（畜生！もう誰も残ってない！くそ！）

彼の機体を取り囲むようにして、OCUのウ・アンツァー部隊が銃口を向けた。

『投降しろ。命は保障する。』

白いウ・アンツァーから彼に向けて、投降が呼び掛けられた。

（あれが隊長機か！あれさえ殺れば！）

彼は機体を走らせ、白いウ・アンツァーに急接近した。一斉に周囲から弾幕が張られ、被弾した機体が悲鳴を上げる。

投降すると思っていた敵のウ・アンツァーが、ロイド目がけて突撃をした。

「チッ！」

キースは舌打ちをして、マシンガンのトリガーを引いた。相当数被

弾したにも関わらず、敵のウ・アンツァーの動きは停まらなかった。
「隊長！」

コックピット中のアラームが悲鳴を上げている。両脚を破壊された機体は、動きを停めていた。左腕は破壊され、千切れるように肘から先がない。ボディは深刻なダメージを受けていて、警報が一樣に脱出を奨めてくる。だが、右腕は辛うじて無事だった。否、使えた。
(せめて道連れにしてやる！)

彼は何故か微動だにしない白いウ・アンツァーに向けて、トリガーを引いた。しかし、それこそが彼の人生の終焉の引き金になった。

「、、、作戦完了。帰還する。」

目の前で、敵のウ・アンツァーが火を噴いていた。破れ被れのマシンガンの発射が、裏目に出た結果だった。マシンガンが暴発し、それによって誘爆を引き起こしたのだ。

「ロイド。」

「なんだ、アルダー。」

「なんだじゃねえ！俺様の前で無茶をするなど言っただろうが！」

「。。。。」

「もう一度あんな真似してみろ！二度とウ・アンツァーに乗れないように両腕をへし折るからな！」

「。。。。」

キャニオンクロウの上空を、OCUの攻撃機がフリーダムに向けて通過していった。

第十五話 フリーダム防衛戦（前書き）

いや、もう本当にごめんなさい。投稿するつもりが、優柔不断な性格が災いして、過度に推敲を重ねようとしたずらに時間を浪費しています。待たせてごめんなさい。

第十五話 フリーダム防衛戦

「早くしろ！敵部隊が接近中なんだぞ！」

「急げ！街の西では既に交戦中だ！」

フリーダム軍のUSN軍の基地からは、次々と市防衛のための部隊が出撃していた。ワタル達偵察隊も、例外なく戦線に刈り出されていた。

偵察隊が帰還してしばらく経つと、ミサイル車両が破壊されたと連絡が入った。その数分後に、OCUの攻撃機による爆撃が行われた。幸いにも偵察隊に被害が及ぶことはなかったが、他の部隊ではかなりの損害を受けたとも聞いている。

西側の防衛ラインに到着した偵察隊は、既に交戦中の部隊を見て幾分かの安堵感を感じていた。そこで師団規模の部隊と戦っていた味方に、地獄の壁が含まれていたからだ。

「グリーグ大尉！こちら特殊偵察隊のシュレア中尉です。指示をお願いします！」

「攻略戦の時にウェンライト小佐といたやつらか。こんなに大勢の部隊の面倒は見きれない。右翼のウ、アンツァー中隊を指揮してくれ！連中の指揮官は既に戦死した！中央は俺達に任せておけ。」

「了解しました！全機、右翼の中隊を助けるぞ！」

「待ってください！」

「お前はさっきの。」

「ケリー小尉です。」

「部下はどうしたんだ？」

「さっきの攻撃機にやられました。自分だけが生き残りました。中尉の指揮下に入ります！」

「よし、何としても死守するぞ！」

右翼の戦線の敵の攻撃は比較的軽微であったが、指揮官を失ったことで部隊は指揮系統が乱れ、適切な戦闘ができないでいた。

「こちら特殊偵察隊指揮官のシュレア中尉。交戦中の機動中隊の指揮系統を建て直す。小隊規模で集結。一時的に後退してくれ。指揮が生きてる隊は我々と合流して、味方が立ち直るまで共に戦ってくれ。以上だ、急げ！」

「主任、何をしていますか！」

整備兵の一人が、輸送車両にウェアアンツァーのパーツや武器、整備に必要な機材を積み込んでいた。

「何ってお前、前線に向かうんだよ。」

一層激しくなった銃声や爆音に声を荒げながら整備兵は反対した。

「わざわざ出向くんですか！」

「戦線とここでは整備に必要な時間に倍ほどの差ができるだろうが。わかったらもっと輸送車両を持ってこい。全員だ。」

「主任、アンタ実は色んなウェアアンツァーに触れただけじゃなからうな!？」

「ば、馬鹿言うな。俺は戦闘に負けたくないんだよ。そ、それにあとから見張ってないと無茶する、だろうが。」

整備兵はライツの様子に少し呆れたが、直ぐに動き出した。

「主任の言うとおりだな。よし、みんな。早いところウェアアンツァー乗りを助けに行こう！」

偵察隊と一部の部隊は、街の西側で大隊規模の敵部隊と交戦していた。

「一機やった、次！」

「キリがない。敵はどれだけの数を揃えたんだ!？」

ワタルは偵察隊と共に戦うウェアアンツァー部隊を援護しながら、自

機を狙う敵機を攻撃した。

「ワタル、ミサイル放つぞ！」

タケシからの無線を受け、機体を翻す。左のビルに身を隠す行程でも、敵への攻撃は止めない。

「ウ、アンツァー隊！こちらは工兵隊だ。特殊な車両を用意した。そいつを撃てばかなりの爆発が期待できる！有効に使ってくれ。」

「感謝する。」

「爆弾を満載した車両の位置をIFF（敵味方識別装置）で送信した。あとは任せたぞ。」

「待った。爆弾の位置は分かった。赤いカーソルはなんだ？」

「ああ、指向性の地雷だ。あっちは自動的に動くから、間違って踏まないでくれ。それから、俺達は弾薬を腐るほど持つてる。必要なら言ってくれ。」

「ありがとう。」

「お互い様さ。アンタらがいるから、俺達は目立たずに済んだんだから。」

「全員乗ったな？んじゃ、いっちょ行きますか！」

整備隊の輸送車隊は、西側の防衛線へ向けて走り出した。

「ん？」

ライツの運転する輸送車が停止すると、輸送車隊の車両全てが停止した。

「どうしました、主任？」

ライツの視線の先には、非武装のウ、アンツァーが一機、佇んでいた。

「おい！そのウ、アンツァー貸してくれないか？」

ウ、アンツァーの下にいた特務中尉は、ライツの呼び掛けに答えた。

「整備隊か？こいつがなんだか知ってるのか？」

「テンダスだろ！作業用ウ、アンツァーの。そいつが必要なんだ！」
「条件がある。」

「なんだ？」

「俺も連れてけ。あれ以外にも、一機ウ・アンツァーがあるんだ。」

「よし。では、一緒に行きましょう。」

ライツは車から降りて、ウ・アンツァーに乗り込んだ。テンダスのエンジンをかけると、隣の格納庫からギザタイプのウ・アンツァーが現れた。

「俺は車両部隊のミケルソンだ。」

「俺は特殊偵察隊の整備隊のライツ主任です。いよし！みんな、改めて出発だ！」

「偵察隊の連中、中々やりますよ。どうやらあちらの戦況は有利みたいです。左翼はまだ分かりません。」

地獄の壁の偵察要員のゲッタ・セドリック少尉は戦況報告を終え、と、すぐに戦闘に戻った。

「よし。ゲッタ。この敵部隊は虫の息だ。あとは他の部隊に任せた。整備と補給を済ませたら再びここに戻ってくるぞ。で、例の偵察隊はまだ戦えるか？」

「それなりにダメージを受けてますが、まだ大丈夫でしょう。ただ、補給は必要みたいでした。」

「やはりここは下がるしかないか。」

「ようやく落ち着きましたね。敵は撤退するみたいです。こちらは機動中隊に損害が、、、大きいですね。」

「ああ。半数はやられただろう。指揮系統も乱れている。」

「俺達も整備と補給が必要です。」

「ランチャー班、残弾数は？」

「ほぼ撃ち尽しました。工兵隊の分も残り僅かです。」

「よし。一時的に後退するぞ。」

「ん？後方から部隊接近。援軍です。、、？テンダス、、！？」

馬鹿な！民間用のウ、アンツァーだ。」

「こちらは補給部隊のライツだ。よう、中尉。整備と補給なら申し付けてくれ！」

「なんで主任がここに？」

「整備が必要じゃないなら帰るぞ？」

「よし。ダメージの大きい機体を優先して修理してくれ。他は弾薬の補給後に修理を待つんだ。」

「地獄の壁からも要請が来ています。」

「地獄の壁！？あの地獄の壁のフロストが来るのか！？くうっ！生きててよかったあ！」

「主任、アンタやっぱりウ、アンツァーに触れただけだな。」

「何い？そんなことどうでもいいじゃねえか！」

「なっ・・・」

整備兵は、開いた口が塞がらない様子。

「よおーし！俄然やる気が出てきたぜえ！整備がほしけりやこのテンドラスに任せな！」

「なかなかうまく整備するじゃないか。」

「まあ、ウ、アンツァーの登場からずっといじってますから。・・・整備すみました。大尉。」

「済まないな。」

「いえ、地獄の壁の機体を整備できてお腹一杯です。」

「引き続き整備を行ってくれ。」

「了解しました。大尉。」

「ようし、野郎共。OCUの虫けらを蹴散らしに行くぞ。」

偵察隊の機体の整備が済むと、敵の第二陣と交戦になった。左翼は近郊を警戒していた諸部隊が新たに戦線に加わり、USNの優勢を維持していた。

「ちっ！間に合わなかった。中尉。味方の防衛隊の一部が全滅しました！」

タケシの放ったミサイルはビルを盾にするOCUの戦車に炸裂した。次いで発射されたミサイルは、後続のウ・アンツァーのボディに直撃した。直撃を受けたウ・アンツァーはバランスを崩し、うつ伏せに倒れ、爆発した。

「ダメージの深刻な機は直ぐに整備隊のいる場所まで戻るんだ。ペセタからの援軍が来るまで持たせれば形勢は逆転する。目の前の敵より大局を見据えるんだ。」

マイクがそう言うのと、何機かのウ・アンツァーが後退した。それらが全て損害の深刻な機体だと確認すると、第三小隊所属の隊員に彼らを援護するように命じた。

「キッド、一度整備隊の場所まで戻るんだ。そろそろリペアが尽きる頃だろう。」

「了解しました。一旦後退します。」

キッドは機体を後退しながら、マシンガンを放った。防衛線に踊り出た敵ストライカー（格闘戦に主眼を置いたウ・アンツァーの総称）に命中し、たたらを踏んで倒れ伏した。キッドがマシンガンの弾をすれちがうメカニックに渡すと、キッドの撃墜したウ・アンツァーが爆発した。

「ちっ。圧されてるな。、、こちらマイク。シュレア中尉。こっちはもう駄目だ。戦線を後退する。」

「分かった。とりあえずはマイクに任せる。気を付けてな。」

「中尉。地獄の壁からも後退するように命令が来ています。市街の入り口まで後退し、そこで地獄の壁が敵を撃破するようです。」

「なるほど。確かにあそこなら狭いから大部隊の行動には適さないな。了解した。全機、後退だ。後退！」

「分かった。後退だな。よし。連中が戻ってくるぞ。整備の準備を急げ。」

ライツのテンドラスから整備隊へと指示がだされると、整備兵達は一斉に準備を始めた。

第十五話 フリーダム防衛戦（後書き）

今後もしっかりと次話を投稿します。気長に待っていてください。でも、絶対に完結させます。今後ともよろしくお願いします。

第十六話 壁の崩壊（前書き）

さあ、行ってみよう！

第十六話 壁の崩壊

対空ミサイルを破壊したその足でフリーダムに侵攻したキャニオンクロウを待ち受けていたのは、味方の救援要請だった。しかし、要請を請けて彼らが到着する直前に正規軍のウ・アンツァー部隊は全滅した。

隊員達の前に立ち塞がるのは、真紅のウ・アンツァー、フロスト。

「六四機動戦隊！」

サカタが敵の正体に気が付いた。

「なんだ、それ。」

キャニオンクロウに同行していた従軍記者、フレデリック・ランカスターが聞くと、J・J・と呼ばれる隊員がそれに答えた。

「知らないのか？USNきつての精鋭部隊だ。」

敵の機動師団を壊滅させた地獄の壁の前に新しく現れたのは、各機のカラーリングに統一性が見られない部隊だった。規模も中途半端だ。敗残兵の寄せ集めだろうか？

「また現れやがったな。」

「あんなオンボロ部隊でここを通れると思ってるのか？」

「ようし、野郎共。セカンドステージを始めるぞ。デИБとゲッタは右翼、リーバスとミリガンは左翼、俺とジョシーが囨になる。」

「オーケイ、ボス。」

「たっぷりいたぶってやる。」

「跡形もなくぶっ壊す！」

「地獄の壁の所以を教えてやる。」

正面にいる二機が囨なのは分かっている。キースは左翼から接近する二機の内、両腕にそれぞれライフルを装備した機体にマシンガンを撃ち込む。マシンガンの弾は機体に命中していたが、大したダメ

ージにはなっておらず、容易に反撃をしてきた。辛うじてライフルの弾を避けた。少しでもタイミングが遅ければ撃墜されていたかも知れない。

「!なかなかやるな。」

デИБの発射するライフルの弾を、青いウ、アンツァーが巧みに回避している。

「だが、その程度のマシンガンの弾幕じゃ地獄の壁は突破出来ないぜ。」

「くっ、こいつらやたらと固え!」

キースが毒ついた。

「囲まれたらおしまいよ、気を付けて!」

ロイドの副官、ナタリー・ブレイクウッドはそう言うのと機体を翻した。

「せめて動きを止められれば、、! J・J・!」

J・J・はキースを狙うウ、アンツァーにライフルで牽制しながら、応えた。

「どうした?」

「地雷を仕掛けたわ!こちらに誘導して!」

「、、分かった。キース、聞いたな? 一旦下がるぞ!」

「ナタリーもなかなか派手なことするねえ。」

敵のウ、アンツァーが後退を始めた。青いウ、アンツァーと緑のウ

、アンツァーが互いに支援しながら、街から遠ざかる。

「はっ!逃げられると思ったのか?」

デИБは素早く機体を滑らせた。ライフルで牽制しながら、確実に当てられる距離まで接近する。

「よし、掛った!付いてきたぞ!」

「ナタリー、そんなところで棒立ちするな！」

「大丈夫よ。」

真紅のウ、アンツァーが接近してきた。

「なんだ、あの赤いウ、アンツァー？」

赤いウ、アンツァーがこちらに銃口を向けて立っている。次いで発射された弾丸はデイクのウ、アンツァーには当たらなかった。

「ヒョッコめ。」

あとほんの少し近付けば、射程に入る。

「死ね。」

FCS（火器管制システム）が敵のウ、アンツァーを捉えた瞬間、激しい衝撃と共に機体が悲鳴を上げた。

激しい土埃を巻き上げ、地雷が炸裂した。対ウ、アンツァー用の地雷が真紅のウ、アンツァーの脚部を破壊した。両脚を失った機体は、つんのめるようにして機体を横たえていた。

「今よ！」

「うおおおお！」

三機のウ、アンツァーの放つ弾丸が機体を文字通り蜂の巣にしていた。

脚部を失った機体はうつ伏せに倒れてしまった。立ち上がるどころか、体勢を変える事すらままならない。

「俺が、こんなオンボロ部隊に、、、。」

辛うじて生きているモニターには、自機に狙いを定める三機のウ、アンツァーが写っていた。そして次の瞬間には、一斉に火を噴いた。デイクは急いで機体の脱出装置を作動させた。しかし、反応はなかった。敵の攻撃は止まない。

「た、助けてくれ・・・。」

機体が爆発し始めた。デイクは愛機が大爆発を起こす直前に、敵の

ウ、アンツァーにペイントされた、谷間を悠々と翔ぶカラスのエンブレムを見た。それが彼の最期にみた光景だった。

「よし、一機撃墜した。」

「待て、もう一機きた！」撃墜したウ、アンツァーの背後から、ストライカータイプのフロストが出現した。

「くそ！デιβ中尉が殺られた！脱出装置が作動しなかった様です！」

ゲッタはデιβ機を撃墜した三機のウ、アンツァーの内、緑のウ、アンツァーに向けて突進した。緑のウ、アンツァーの両腕に装備したライフルが火を噴いた。左腕の関節に弾が命中し、肘から先が千切れ飛んだ。しかし、ゲッタは突進をやめなかった。

「まだ来るか。だが、この銃はアサルトライフル（突撃銃。ライフルとマシンガンの中間的な武器）だ。近付けば、こうだ！」

J・J・は発射装置を連射モードに切り替え、力一杯トリガーを絞った。

ゲッタの攻撃範囲に入った瞬間、敵のウ、アンツァーから猛烈な射撃が始まった。装備しているのはライフルの筈だ。なのに、連射している。

「あ、アサルトライフルかっ！？」機体が悲鳴を上げ、ゲッタ機は活動を停止し倒れてしまった。ゲッタが脱出装置を作動させると、ウ、アンツァーのコックピットが射出された。

「ぐ、ぐふっ！」

その着地の衝撃で、ゲッタは頭を打った。次に彼が目覚めるには少し時間が掛った。

「く、ちく、しょう。」

ゲッタはそのまま後方に下がり、予備の機体を目指し駆けていった。

ヤン・メイファの前方に、真紅のランチャーが二機いた。

「ポール、二機ランチャーがいるよ。アタシが囧になるから、合図でフレデリックと一斉に一機仕留めて。」

「わかりました。」

「いくらなんでも元牧師とジャーナリストがこんなこととしていいのか？」

「今更何言ってるんだ。すでにフレデリックは何機か撃墜してるじゃないか。」

軽い口調でそう言いながら、ヤンは機体を駆っていた。

「仕方なかったんだ。正当防衛だ。」

「マリア様は我々を見ていて下さいます。」

「生憎とあたしはキリスト教徒じゃないよ。」

「リーバス、敵のウ・アンツァーが一機。淡い赤色をした機体だ。仕留めるぞ。」

「オーケイ、ベイベイ。相手してやるぜ。」

二機のプロストが射撃体勢に入った瞬間、リーバス機がけたたましいアラームを鳴らした。

「なっ!？」

一方、補給車のドライバー、ピウィー・リッチバーグJr. は如何に敵のウ・アンツァーに狙われない位置に陣取るか思案していた。

「うーん。前に出たら危ないし、下がりすぎたらみんなが危ないんだよねー。」

とりあえず、ランチャーを装備したフレデリック機とポール機はや後方に車両を停止させた。

「ロイド。フレデリックとポールの後ろで待機するよ。何かあったら言ってね。」

「了解した。」

そのまま彼は大型トラックの荷を解いて、整備・補給の準備を始め

た。

「今だ！」

ヤンの合図で、二機のウ、アンツアーのミサイルが放たれた。ミサイルは発射体勢に入った機体に向けて飛行した。敵のミサイルが発射された瞬間、飛来したミサイルが爆発した。発射されたばかりのミサイルも誘爆し、巨大な爆発が連鎖した。更に両肩に装備したミサイルランチャーも爆発し、瞬く間に機体は原型を失った。

「リーバス！応答しろ！」

「み、ミリガン、、。構うな、奴らを攻撃、しろ！」

リーバスがそう言った次の瞬間、淡い赤色をしたウ、アンツアーが至近距離まで詰めていた。そして、素早く振り上げたロッドを振り降ろした。

「リーバス！リーバス！」

返事はなかった。変わりに、リーバス機が爆発という返答を返してきた。

「リーバス・・・！」

リーバス機を仕留めた敵ウ、アンツアーは、ミリガンの懷にまで距離を詰めようとしていた。

「二人とも、こっちこっち。早くしないとヤンが危ないよ！」

「急ぎましょう。補給をお願いします。」

「俺は後でいい。とりあえず写真撮ってるからな。」

「フレデリックったら。もお。」

「仕方ありません。彼は兵士じゃありませんから。」

「ポールだって牧師じゃないかあ。」

「元牧師です。ただ祈るだけでは誰も救えないのをラークバレーで知りました。だから、仲間の仇を討ちたいんですよ。前の仲間達のも。」

「喰らえっ！」

ヤンの放ったロッドの一撃が敵ウ、アンツァーを捉えたが、致命傷には至らないようだった。

「固すぎるでしょ！」

彼女にとつての幸運は、敵のウ、アンツァーが格闘戦に疎いところだった。しかし敵は、それを苦にもしない防御力を持っていた。

「くそっ！」

ミリガンは打撃機構を用いて反撃をするが、もともと格闘戦の苦手な彼に当てる事は出来なかった。不意にバランスが崩れた。しかし、それが幸いして敵との距離が詰まった。ミリガンが放った打撃が、見事に敵に命中した。地獄の壁のフロストの打撃の攻撃力は、従来フロストよりも強力だった。敵のウ、アンツァーの左腕が折れ曲がり、機体を転倒させた。

「しまっ、！！！」

尋常ではない衝撃のあと、バランスを崩した自機は転倒した。

「まずい！」

何とか機体を立たせようとしたが、左腕を失ったせいか、なかなか立ち上がらない。敵のウ、アンツァーがランチャーの射程距離までの距離をとろうと、後退していく。ヤンは死を覚悟した。

「これで終りだ！吹っ飛べ！」

しかし、発射の寸前に別方向からミサイルが飛来した。何とかそれをやりすごすと、ミサイルを放った機体が目の前にいた。ミリガンは先にその機体を撃墜しようと、狙いを定めた。しかし、更に別の方向からもミサイルが飛来し、命中した。機体が大きく揺れ、さらなる衝撃が機体を襲った。ミリガンはそれでもミサイルを放った。当たらないかも知れないが、今は一矢報いたかった。ミサ

イルの残弾が切れると再び命中したミサイルによって、機体が炎を上げ始めた。

（せめて、もう一撃加えてやる！！）

「うおおおおお！！」

ミリガンは淡い赤色をしたウ・アンツァー目がけて燃え盛る機体を走らせた。

ヤンは、なかなか立ち上がらない機体に苛立っていた。そこへ、文字通り真紅に燃え上がるウ・アンツァーが捨て身の突撃を行っていたからだ。

「あんなものに、ぶつけられたら！」

だが、真紅のウ・アンツァーはヤン機にたどり着く前に、バラバラに吹き飛んだ。ポールの装備していたバズーカが直撃したのと、フレデリックの放った最後のミサイルが同時に炸裂したからだ。

「は、はあ、助かったよ。二人とも。」

「マリア様は見ていて下さりましたね。」

「マリア様ってのは勝利の女神かな？」

ヤン機の脇に、一面の補給車が停止した。

「さあ、ヤン。修理と左腕の換装するよ。早くウ・アンツァーから降りて手伝って。」

「ああ、頼むよ。」

ヤンがコックピットから降りた瞬間、いつの間にか降りていたフレデリックに写真を撮られた。

「何だい？ あたしの写真なんか撮って。」

「いい画になったぞ。地獄の壁と互角に闘った女性パイロット。」
「やめてくれよ。苦手だよ。そういうのは。」

「ああ、でもヤンの弟さんがそれを見るかもしれないよお？」

「それは一利ありますね。ヤン。撮ってもらいましょうよ。」

「ええ？ ポールまで、、、と、撮りたきゃ勝手に撮りな。ピウイ
ー。換装するよ。」

グリーグのセンサーから部下の反応が四つ消えるのに、そう長く時間とはかからなかった。

程なくして、正面から三機のウゝアンツァーが現れた。グリーグから見て中央に灰色のウゝアンツァー、左に白いウゝアンツァー、右に赤めのオレンジ色をしたウゝアンツァー。いずれも中距離戦仕様の様だ。グリーグは手始めに中央の機体にライフルを発射する。中央の機体は最小限の動きでそれを避けた。

「ふん。中々の腕前の様だ。ジョシー、焦るなよ。」

「え、は、はい。」

（グリーグ隊長が焦るなだって？ふっ。俺は焦ってなど！）

ジョシー機が突然機体を走らせ、右のオレンジのウゝアンツァーに狙いを定めた。

「ちっ！焦るなど言っただろうが！」

グリーグはライフルで弾幕を張り、ジョシーを援護した。三機の敵は散開し、各々が射線上に入らないようにしてジョシー機を取り囲んだ。次いで包围網から発射された弾丸の嵐により、瞬く間に炎に包まれた。

「お、俺がこんなやつらに、、！？」

そして、それがジョシーの最期の言葉となった。

グリーグは一度機体を市街の入り口まで後退させると、爆撃による瓦礫をバリケードに戦闘体勢を整えた。市街の入り口では、既に歩兵同士の銃撃戦が展開されていた。

第二七話 撤退（前書き）

いつのまにやら不定期更新です。

第一七話 撤退

一時的に敵軍を退けた偵察隊以下の一部の部隊は、小康状態を利用して整備を行っていた。

「主任、整備はまだ終わらないか？」

前線に程近い格納庫では、様々な部隊がウ、アンツァーや車両の整備を行っていた。格納庫と言っても、闘技場の一角を利用した簡易的なものだ。つい先程まで使われていたのだろうか、駐車場には航空燃料の満載された車両がある。

「いや、それにしてもフロストは良いなあ。あのフォルム、マイクの機体とは少し違うなあ。その辺やっぱ特殊小隊って感じするなあ、うん。そう思わないか、ワタル？」

「はあ、まあ。それより、補給済ましてくださいよ。」

「おお、そうだ！新しくフロストの姉妹型がロールアウトする時期じゃないか。確か、ブリザディアだったかな。新型も悪くないが、地獄の壁のカスタムを正式に取り入れるのも悪くないな！よし。それでいこう！」

「主任、前から聞きたかったんですが。」

「なんだ？ウ、アンツァー、武器のことなら俺に聞け！一晩どころか三日三晩付き合ってる！さあ、ドンとこい！」

「俺達の機体は主任の趣味で決めてないか？」

「（ギクッ！）馬鹿言うな。俺はちゃんとお前らの得意な戦い方を考慮して機体を選んでるんだ。ま、まさかお前俺が単にウ、アンツァーに触れたいだけの整備兵だと思ってるのか？心外だなあ。俺は良かれと思ってやってるんだ。」

「じ、冗談ですって。主任。（触れたいだけなのか、、？）」

偵察隊がリラックスしていた矢先、荒い息をしながら一人の歩兵が駆け込んで来た。

「大変だ。突破された、、」

慌ててまわりにいた隊員が駆け寄ると、歩兵は声を張り上げて伝えた。

「第六四機動戦隊が全滅した！地獄の壁が突破された！」

「なんだって！本当か！」

「本当だ！俺は見たんだ！敵の傭兵部隊にことごとく撃破された。

既に市街じゃデニス・ギフォード特務司令率いるタンゴチームが交戦中だ！」

シュレアはそれを聞くと矢継ぎ早に指示を出した。

「全員搭乗！第一小隊は中央、第二小隊は左翼、第三小隊は右翼に展開！友軍部隊と協力して敵を迎え撃つ！急げ！」

「弾薬の補給済んだ！任せたぞ、俺のウ、アンツァー壊すなよ！よし。手の空いた奴は爆薬をありったけ廃車に設置するぞ！時間との勝負だ！早くしろ！」

「主任、俺たちは工兵じゃないんだぞ！」

「黙って見てるのか？中尉、異存はないよな。」

「すまない。頼むよ。主任。」

「了解しました、中尉。おお、そうだ。レオン。お前の機体に新型の武器搭載したぞ。」

「これは、ガトリングガンですか！」

「ああ。プロトタイプを拝借した。連中に弾丸の嵐をお見舞いしてやってくれ。」

そう言うと、主任を含め衛生兵を除いた兵達は爆薬を手に、格納庫をあとにした。

「よし。準備は良いな？全機、出撃！」

ゲッタが予備のフロストに搭乗した時には既に、市街での乱戦にもつれ込んでいた。恐らく、部隊は壊滅したのだろう。

「道を空ける！壁が通るぞ！地獄の壁はまだ破れさせねえ！」

ゲッタの駆る機体は、敵味方入り乱れる戦場を横縦無尽に駆け回った。しかし、ゲッタの奮戦にも関わらず、各部隊は次第に分断され

ていった。気付けば、フリーダムには敵部隊で溢れていた。

「来たぞ！敵遊撃機動隊、ウゝアンツァー数機に歩兵がうじゃうじゃ！歩兵はレオンに任せる。掃射してやれ。」

「了解！」

レオン機のカトリングガンが唸りを上げて回転し、次いで大量の弾がバラ撒かれた。敵の歩兵は物陰に身を潜め、ウゝアンツァーに勝敗を託した。

上空から、二機の戦闘ヘリが現れた。戦闘ヘリの発射したミサイルによって、歩兵数名があるものは吹き飛ばされ、あるものは絶命した。

「制空権を奪われたか！」

ウゝアンツァーの足下にいた歩兵や装甲車がそれぞれ歩兵やヘリへ攻撃を開始した。

一方ウゝアンツァー同士の戦いは優勢を保っていた。しかし、ワタルの機体の無線機からは友軍部隊が突破されたという情報が少なからず入ってきた。

「隊長。北側の戦線は崩壊寸前です。東に回りこまれる前に退路を確保しましょう。」

「了解した。第三小隊は退路を確保してくれ。他は敵の迎撃を続けるぞ。」

シュレア機のショットガンが敵の装甲車を撃破すると、また別のウゝアンツァーが西から侵入してきた。タケシに狙いを定めたウゝアンツァーをワタルがマシンガンで撃墜した直後、二発のミサイルがワタル機をかすめた。ミサイルはそのままタケシ機を背後から襲った。

「タケシ！」

ミサイルが炸裂し、タケシ機は炎を上げながら仰向けに倒れた。

「畜生！タケシ！おい！」

ワタルは接近する敵機をマシンガンで牽制しながら、自機を炎上す

るタケシ機に寄せた。

「返事しろって！おい！タケシ！」

「そう、怒鳴るなよ。」

「タケシ。無事か？」

「わからない、、足の感覚がないんだ。」

「脱出出来るか？」

「手伝ってくれないか、、？」

「衛生兵！早いところ出してやってくれ！」

程なくして格納庫から駆けてきた衛生兵達が、タケシ機に取り付いた。ワタルは救出までの一部始終を見届けた。

（タケシ、、！）

衛生兵によって引きずり出されたタケシの下半身が失われていた。おびただしい出血による血の痕が、タケシが格納庫に収容されるまでに描かれた。

（畜生！OCUの糞野郎共！）

ワタル機のマシンガンが次々と敵機を捉え、一機、また一機と撃墜していった。一機のスライカーがワタル機に向けてパイルバンカーを振り向けた。ワタルは機体を急速後退させて距離をとりながら、マシンガンの弾を撃ち込んだ。スライカーは機体を踊らせ、倒れながら爆発した。

「隊長。こちらマイク。退路は確保した。第三小隊は退路を維持するぜ。」

「・・・ろ！」

「なんだ？おい！やられたのか？」

「ワタル！無茶はよせ！！」

「ワタル？」

「うおおお！」

ワタルは我を忘れて敵のウ、アンツァーを攻撃していると、遂にゼニス
の右腕に装備されていたマシンガン
の弾が切れた。その瞬間、OCU
の戦車の放った砲弾がワタル機
の至近距離とも言える位置で炸裂した。

「ぐあぁっ！」

機体そのものに大きなダメージは無かったが、衝撃と爆風で機体が
バランスを崩し、片足が浮いた。そこへ別の戦車の放った砲弾が機
体側面、右腕を直撃し、ワタル機が左側に転倒した。そこはちよう
ど歩兵同士の戦闘の渦中にある場所だった。銃火の間に入った機体
は、歩兵の戦闘を中止させた。

「ワタル！早く機体を立たせろ！」

ニヤンの必死の呼び掛けに、ワタルはハッとした。敵の歩兵が、ワ
タル機に向けて前進している。背後の味方はワタル機に遮られて前
進出来ない。

そこへ、歩兵部隊のバズーカが機体で炸裂した。ウ、アンツァーへ
のダメージは軽微だが、ワタルを混乱させた。

ジリジリ接近する歩兵。機関銃を据え、数人の兵がワタル機のコツ
クピットハッチ（出入口）へと近付いて来る。

「今だっ！」

突然ワタル機の側面から組織的な攻撃が始まり、敵は慌てて遮蔽物
に身を隠した。

「ワタル、大丈夫か？」

そこには、第三小隊のマイクだった。

「マイク、退路の確保はどうした？」

「ペセタからの先遣隊は、フリーダム
の撤退支援として退路の確保を
開始したんでね。それを伝えに
来ました。」

マイクは歩兵にマシンガンを掃射し、ワタル機を立ち上がらせた。

「撤退ってどういうことですか！？」

ワタルは撤退という事態を呑み込めなかった。

「隊長、ペセタ駐屯地への撤退命令が正式に下されました。」

シュレアはショットガンで敵のウェアンツァーの脚部を損傷させて、言った。

「全機へ。ペセタまで後退する。・・・撤退だ。急げ！」

「歩兵部隊は既に撤退を始めてるから、おれたちもすぐに離脱出来る。たった今後方の医療チームから連絡が・・・ワタル・・・タケシの戦死が確認された。」

撤退を始めた部隊で、ワタル機だけが、動きを停めた。

「ワタル、気の毒だが・・・」

ニャン機とマイク機は、動きを停めたゼニスXを半分引きずるようにして後退を始めた。

USNの部隊が撤退を始めたのを知ると、OCUのウェアンツァーは追撃を開始した。しかし、フリーダム市街に予め設置してあったトラップや工兵部隊やライツら補給部隊の仕掛けた爆薬や地雷は、追撃の手を緩めるのに効果的だった。

撤退を開始した一部の部隊が分断されて北のウェイン山脈に逃げ延びたが、シュレア率いる偵察隊はペセタまで無事に辿りついた。こうしてフリーダムは再びOCUの領地となり、戦争のパワーバランスは逆転を始めた。

USNは精鋭であるフリーダム防衛部隊の三割を損失し、地獄の壁の全滅は今後の士気に大いに影響を与えることになった。

そして地獄の壁を破った部隊、キャニオンクロウは畏怖された。

偵察隊は、しばらくの期間部隊として機能することができず、戦線に復帰出来たのはとある特務機関からの命令が下りた時だった。その機関の名前はUSN陸軍 兵器開発特務機関 通称 ニルバーナ機関だった。

第十八話 再起

敗残部隊の集結するペセタ駐屯地に与えられたのは、全軍の再編成が完了するまで戦線を維持するという命令だった。

兵士たちの間には司令部に見捨てられたと考えるものもあり、士気は低かった。多数の死傷者を出した偵察隊も、士気は低いままであった。

マイクと歩兵上がりの隊員は平常通りに過ごしていた。歩兵部隊への『時間稼ぎ命令』は頻繁に下されるし、何よりマイクはアフリカ大陸でウ・アンツァーの前身であるWAWでの戦闘経験もあるベテランである為、これくらいでは動揺しない。アフリカの紛争では、勝利を目前に他国の介入を受け、その度に多くの兵士が戦死しているからだ。

ワタルは親友であるタケシの戦死以来一度も戦闘に参加していない。偵察隊の第三小隊は退路の確保を担当したため、ほとんど無傷でペセタに撤退しているために、敵の侵攻の度に遊撃部隊として戦闘に出ている。シュレアやニャンは機体の修理が比較的早くに終わったため、自発的に第三小隊を率いていた。しかし、ワタルはゼニスXが試作機であるため、補給が届かない状況ではなかなか修理が思うようにいかず、出撃が可能な機体も全て出払っているため出番は無かった。

また、部隊で最も戦意をなくしてもいるため、パイロットとして復帰できないのではないかとシュレアやマイクに危惧されていた。

そんな最中、大量の試作機を従えて、新しい部隊がペセタ駐屯地に到着した。彼らの部隊名はUSN陸軍 兵器開発特務機関。

偵察隊は新たに機体を至急されると共に、新たな任務を与えられた。パイロットの数が足りないため部隊は縮小されたが、偵察隊はフリーダムとUSNの誇る難攻不落の要塞、モーガン要塞とを結ぶ山岳地帯への偵察命令が下された。

だが、ワタルは出撃を拒否した。

「嫌だ・・・行きたくない。」

ワタルはタケシの戦死が信じることができないのだ。

「タケシが戻って来るかも知れない・・・」

「ワタル。タケシは死んだんだ。」

「生きてるんです！アイツが死ぬわけじゃないでしょう！」

シュレアやニャンが必死で説得したが、お手上げの状態だった。

そこへ、やりとりを聴いていたマイクが、避難民の中に顔見知りを見つけた。やりとりを聴いていた顔見知りもマイクに気が付いた。

マイクはその人物を手招きすると、その人物はワタルの前に立った。シュレアとニャンはその場を離れ、顔見知りに説得を委ねた。

「ワタルさん。」

ワタルは声の主を見上げた。

ニナだった。

「あなたの部隊の・・・友達のことだけだ。」

ワタルはうつ向いたままだ。

「彼は・・・タケシさんは短い間だったけど、諦めずに闘ったわ。」

「聞きたくない・・・っ！」

ワタルは両腕で耳を塞ぎ、頭を振り乱した。

「あいつが・・・死ぬわけないんだあっ！」

シュレアはワタルの様子を見て、何か言おうと一歩近付いた。

マイクもまた、ワタルに一歩近付いた瞬間だった。

ニナが思いきり、一切の手加減もなくワタルの頬に平手打ちした。

これにはワタル本人のみならずその場にいたシュレアやマイクといった偵察隊のメンバーや避難民、守備兵まで驚き、振り向いた。

「逃げないで！」

今度はワタルもニナから顔を背くことが出来なかった。

「闘うことから逃げないで。」

ニナはいつの間にか涙を流していた。

「タケシさんはね。先天性の病気で余命はあと半年だったけど、最

後まで諦めずに闘ったわ。あの時大怪我なのに私に笑顔をくれたのよ。」

「タケシが……余命半年……。」

「アタシだって……帰るところ無くしても……看護師辞めなかったのに……負けないでよ……。」

ワタルは、自分がいかに大人げないか悟った。

「ニナ……ごめんね。俺……子供だったな。」

同時に、ワタルは自分がなんのために戦ってきたのか、なんのために戦うのか、自分に聞いたが答えは見つからない。

「……俺はなんのために戦えばいいんだろう……。」

いつの間にかペセタに雨が降り注ぐ。

そしてこの一時間後、ニルバーナ機関の運んできた機材によりゼニスXの整備が完了した。

偵察隊は新たな人員と編成で偵察任務を再会した。

第十九話 モーガン要塞攻防戦

戦う理由を見失ったまま、ワタルはゼニスXに搭乗し、戦場へと向かった。

衛星からの情報を受け取り、それを開く。

相変わらず敵に変化が見られない。

ごく小規模な部隊がウェイン山脈を東に、モーガン要塞に向けて移動を続けているのみだ。恐らくは偵察部隊だろう。モーガン要塞側も察知しているに違いない。万が一にも要塞が攻撃されることはないだろう。大部隊を投入しても攻略は至難の技。ましてやたかが十数機のウ・アンツァーに攻略できるものではない。

だが、一応は任務だ。モーガン要塞に向けて無線連絡を入れる。

「こちらはペセタ防衛部隊所属の偵察隊。モーガン要塞に向けて敵部隊接近中。規模は少数。偵察隊と思われる。」

『こちらモーガン要塞守備隊。こちらでも確認している。当要塞はフリーダム戦より戒厳令下にある。当方の戦略により当該部隊を泳がし、帰還したところを当方の要塞砲で一斉攻撃する。通報感謝する。』

「全く無謀にも程があるぜ、オルソンの野郎。」

キースは上司への悪態を吐きながらモーガン要塞への『悪路』を進んでいた。

「ウ・アンツァーでこの崖を登破するっただけで大仕事だぜ・・・」

同じくアルダーも『悪路』に嫌気が差している。

「いい画だぜ。お前ら。」

従軍記者のフレデリックは部隊のやや後ろから傭兵たちのウ・アンツァーが崖を侵攻する雄姿をカメラに収めていた。

「イーヒン、大丈夫かい？」

その前方では、ヤンの操る赤い機体が同じく赤い機体を気遣いながら行軍している。

「大丈夫だよ姉さん。ちょっとロケットが重いけどね。」

先日キャニオンクロウが敵の脱走兵のウ・アンツァーを保護した際に乗っていたパイロットがヤンの実の弟、イーヒンだった。イーヒンはそのままキャニオンクロウに編入となった。

「でも、家族が離れ離れにならなくて良かったよ。」

そう呟くのはモーリー。キャニオンクロウがラークバレーに到着した際にUSN軍と交戦。ラークバレーの生き残りだ。

「みんなお喋りはそこまでよ。もうすぐ目標地点よ。」

「了解。」

ナタリーがそう言うのと、サカタがそれに応える。

「要塞砲は協力だが、懐に入れば問題ないだろう。固まれば的になる。味方との距離に注意しろ。全機、前進！ピウィー、お前は待機しろ。トラックでは要塞砲から逃れられない。」

ロイドは矢継ぎ早に命令を下した。

「わ、わかった。」

ピウィー・リッチバーク・Jr. はロイドの命令に従い、補給トラックを要塞砲の死角に隠蔽した。

キースは前方から接近するウ・アンツァーにマシンガンを斉射した。

「前方に敵ウ・アンツァーだ。機種は・・・うおっ！」

「キース、どうしたんだ？」

サカタは対空砲座を破壊しながら、キース機にカメラを向けた。視界から消えたキース機が、左腕を失いながら後退してきた。

「キース！無事か！？」

「くそっ、左腕やられちゃったか。敵ウ・アンツァーは機種不明。かなり速いぞ。あと二機確認してる。」

「何ッ！」

シュレアは偵察衛星からの情報を見て驚愕した。

「どうしたんです？」

ニヤンが聞くと、シュレアは驚きを隠せない様子で答えた。

「敵の主力部隊がペセタに向かっていて！それに、これは・・・？」

「隊長？」

「・・・ペセタは囲だったのか！」

「ど、どういことです！？」

「敵はフォートモーナスに空挺部隊を送り込んでいる。」

「で、でも、モーガン要塞は！？砲撃は！？」

「まだだ！」

「そんな！どうして気付かないんだ！」

『こちら偵察隊！敵の主力部隊がペセタに侵攻準備中！至急砲撃されたし！』

「了解。準備完了次第砲撃開始する。」

男はヘッドマウント式のヘルメットに表示される情報を解析した。

「へえ・・・反応早いなあ。」

彼は無線の周波数を合わせた。

「ロイド。ハンスだけど。」

『どうした？』

「ハッキングは問題ないよ。要塞の指令室になりすましてる。あとは、ここに援軍が来ないように時間稼ぐよ。」

『了解した。それが済んだら、ウゝアンツァーでキースの後退を援護しろ。』

「わかった。」

『こちらモーガン要塞！ウゝアンツァーの奇襲を受けている！至急救援を寄越してくれっ！』

「こちらフォートモーナス了解。ウィアンツアーをヘリで空輸している。」

ハンスは12歳で軍のネットワークをハッキングし、破壊した腕を発揮し、部隊の危機を未然に防いでいた。

『偵察隊！そのままフォートモーナスに移動し、本営の部隊と合流せよ！』

「こちら偵察隊、了解。」

シュレアは答え、機体を翻した。

「隊長、モーガン要塞へは行かないのですか？」

「命令だ、行くぞ。」

「・・・はい。」

「カークランド大佐！どこへ向かう気ですか！？」

「私も出撃する！機体を遊ばせている場合ではないのだ！」

「あ、相手はキャニオンクロウですよ！？」

「私は要塞指令として黙ってここを明け渡す気はない。旧式の機体も出せ！総力戦だ！」

そう言うと、モーガン要塞指令ザイバー・F・カークランド大佐は、ウィアンツアーのハッチを閉めた。

「ドリスコルの納入した試作機がどれほどのものか・・・アテにするわけにはいかんのだ。」

彼は一人呟くと、部下と共に烈しく火線の飛び交う戦場へ駆けた。

フレデリックは激しい攻撃に晒されながらも、懸命にシャッターを切っていた。

「ロイド、敵のウィアンツアーがまだ来るぞ。」

「ハンス、要塞の入り口にお見舞いしてやりましょう。」

ボールはそう言うと、新たにウ・アンツァーが現れた入り口に向けてロケットランチャーを発射した。続けてハンス機の放ったロケットランチャーが内部で炸裂する。すると、要塞内部で爆発が連鎖した。

「大佐、脱出してください！」

「何事だ！」

「弾薬庫に直撃です！誘爆が止まりません。」

「なんだと！」

直後に、カークランドの前方にあった要塞砲『アテナ』が土台から跡形もなく吹き飛んだ。

爆風による粉塵で視界が覆われた瞬間、煙の壁の向こうからの火線を浴びた部下のウ・アンツァーが機能停止に追い込まれた。

「くっ・・・これ以上やせん！」

だが、彼の後方にある要塞砲『アポロン』は火炎放射によって砲身が曲がり、その役目を終えている。また、数秒と経たないうちに要塞の反対に位置する要塞砲『ゼウス』もまた轟音と共に破片を宙に巻き上げた。

「大佐、試作機三機、全滅です！」

「おのれ、キャニオンクロウ・・・！」

『ふん。やはりこんなものか。』

そこへ、ドリスコルの呟きが聞こえた。ドリスコルは要塞を守るつもりは始めから無い。データ収集のために機体を提供したにすぎないのだ。

「・・・全員、要塞を放棄。フォートモーナスへ撤退せよ。繰り返す。フォートモーナスへ撤退。」

「大佐！私は残って戦います！」

「ならん。戦争はまだ終わっていない。フォートモーナスへ行き、本営を守れ。」

「隊長。要塞砲は全て破壊しました。敵は撤退していきます。」
副官であるナタリーは、敵の新型機の残骸の傍らで報告した。

「いや、隊長。一機残ってます。殿のようです。手慣れた操縦だ・
・何っ！ちくしょう！」

「サカタ、どうした？」

「脚部破損！脱出します！」

「野郎！うおおっ！」

「コング！コノオツ！きゃああっ！」

「どうした、コング！ヤン！？」

「二人とも無事です！敵、隊長に向かってます！」

三機の戦闘能力を奪った。次は指揮官機らしき機体だ。

だが、残弾は残り少ない。右腕のマシガンは後数秒と連射出来ない。左腕のバズーカは後三発。右肩のシールドは半壊。左肩のミサイルランチャーは一発。それで決着がつかなければ、撃破された機体から拾いあげるしかない。

「さあ、行くぞっ！」

彼は敵のマシガンの弾幕をかくぐりながら肉薄する。左に向かう敵に向けてマシガンで牽制する。それを回避した敵は反対に軌道を変える。マシガンを棄て、バズーカを撃ち込む。バズーカは外れ、要塞の外壁を大きく削った。

敵の放ったマシガンを右肩のシールドで防ぐ。半壊したシールドはいとも簡単に砕け、右腕は弾丸を受けて火花を散らした。

「まだだっ。」

彼は再びバズーカを放つ。弾丸は逸れたが、爆風と破片により、バツクパツクを損傷させた。

キースは換装した右腕に装備したライフルで敵の機体に狙いを定める。だが、二機は激しく動き回るために、うまく狙いが定まらない。「これじゃあ、ロイドに当たっちゃもう。」

キースは勝負の行方を追っていた。

カークランドはバズーカを放つ。最後の一発は外れた。破片によって相手は多少よろけたが、戦闘に支障はないようだった。

彼は、左肩に装備したミサイルを放った。ミサイルは敵機をすり抜け、試作機の一機を吹き飛ばした。

「これで役目は終えた。」

彼は最後に、バズーカの銃身を構え、敵機に突撃した。

第二十話 フォートモーナス防衛戦（前哨戦）

OCU軍によるフォートモーナス攻略作戦『鷹の涙』は第一段階であるモーガン要塞の攻略を成功させ、ついに最大目標であるフォートモーナス攻略に移行した。

これに対し、USN軍はモーガン要塞を要とした防衛作戦を画策した。侵攻するOCU軍の主力部隊をモーガン要塞の要塞砲により分断、フォートモーナス市街でこれを撃破するのが主な内容だ。本国からの援軍である第三艦隊の到着する明朝までが鍵だった。

しかし、当初予定されていた砲撃はほとんど行えなかった。モーガン要塞がキャニオンクロウの奇襲で陥落したためだった。

「第三艦隊にはストライクワイバーンズがいる！明日まで持たせろ！」

無線からは、前線で戦う兵士たちを鼓舞するための呼び掛けが絶えず流れていた。

フォートモーナスから十キロほど東にある仮設シェルターの中で、ニナはその無線を聞き続けていた。

注意深く聞いてみると、前線の兵士の交信も聞こえて来る。

敵の出現。

攻撃の指示。

撃破した。

やられた。

やった。

駄目だ。

混沌とした状況が無線を通して聞こえてくる。

中には誰かの戦死報告や負傷者の悲鳴すら聞こえた。

「誰か！医者を呼んでくれ！医者はいないか！」

無線から目を離すと、入り口付近に、負傷者を抱えた兵士が肩車をしながら叫んでいた。

支えられている兵士の上半身が鮮血で彩られている。

「誰でもいい！手当てを頼む！」

戦闘地域から離れたこんな場所にも、負傷者が運び込まれ始めたのか。

ニナは立ち上がった。

「私は看護士です！」

ニナの戦いが始まった。

「いけません！グリーグ大尉！この機体はまだ調整中で」

「さっさとそこを退け！踏み潰されたいのか！」

地獄の壁の隊長のグリーグは、フリーダム市の防衛戦でキャニオンクロウと交戦し、全員を失った。風の噂でゲッタの生存を聞いたが、今は彼の搜索どころではなかった。

「俺の部下を可愛がってくれたキャニオンクロウがいるんだ！」
彼が機体を起動する。

大火力の前部キャノン、大型のスラスタとそれらの冷却装置、そして下部につけられた大型の機関砲が特徴的な機体。

サカタインダストリイ type-08BS、通称シーキング型と呼ばれる機体は、その巨体を揺らし、戦場に産声を上げた。

グリーグは前方から接近する敵のウ・アンツァーに向けて、シーキング型のキャノン砲を発射した。

発射の衝撃は凄まじく、付近のビルの窓ガラスが砕け散り、駐輪してあったバイクが転倒した。

放たれた砲弾は敵のウ・アンツァーを直撃した。モーガン要塞の要塞砲には遠く及ばないが、並大抵の破壊力ではない。敵機は文字通り砕け散り、付近のウ・アンツァーも砲弾の破片で大きな損傷を受けた。

それを乗り越えて、三機のウ・アンツァーが駆けてきた。

グリーグはすぐに次弾を装填し、発射した。最後尾のウ・アンツァー

ーは直撃を受け、跡形もなく吹き飛び、二番手を務めていた機体は背部に破片と爆風を浴びて前のめりに倒れた。

先頭の敵機が両腕に装備した攻撃力の高い大型のマシンガンを発射しながら肉薄する。

シーキング型の曲線を描く装甲はマシンガンの弾を受け流した。

敵機は諦めずにマシンガンを乱射したが、グリーグは下部に取り付けられた大型機関砲を発射した。

ものの数秒で、敵機は誘爆を起こし、爆発した。

グリーグは機体の向きを変えた。

回りこもうとしていた敵のミサイルに向けてキャノン砲を発射する。今度は直撃こそしなかったが、敵の眼前のアスファルトに巨大な穴を空けていた。間発入れずに発射した機関砲が轟音を響かせる、周囲の建物が次々と破壊されていた。瓦礫が降り注ぎ、敵機は身動きが封じられた。そこを他のウァンツァーに撃ち抜かれ、機体は活動を停止した。

シーキング型は敵の侵入口付近に向けて砲撃を始めた。

隠れていた敵機が慌てて飛び出す、機関砲によって次々と葬られていった。

「た、大尉！来ましたっ！第二波の殿にキャニオンクロウがっ！ど、どうしますか？」

「望むところだっ！全機、戦闘体勢を取れいっ！カラスなど叩き落としてしまえ！」

そう言ってグリーグは敵の前衛に向けてキャノン砲を発射した。

キャニオンクロウの名に怯えていたUSNの兵士たちは、敵機がいつも簡単に破壊されるのを見て、勇気を振り絞った。

誰も後退しなかった。

グリーグの周りの兵士の士気は最高潮に達していた。

「あ、あれは、シーキング型ー！」

イーヒンが敵の試作機を見て、声を上げた。

「知ってるのか？」

フレデリックがイーヒンを問いたです。

「前に見たことがある。見た目よりかなり速いから気を付けて。」

「敵は決死の覚悟で来るだろう。油断するな。」

ロイドの訓辞を聞いたピウィーが、ゴクリと喉を鳴らした。

「全機、前進！」

第二十一話 フォートモナーナス防衛戦くタンゴ・チームく

フォートモナーナス市街では、壮絶な市街戦が展開していた。

市街のブロックのひとつをめぐって一進一退の攻防が続いた。

ウゝアンツァーや戦車、装甲車が猛然と砲火を交える中、ひとつひとつのビルの内部でも歩兵による陣取り合戦が激化していた。

USNのロケットがビルから発射されOCUの戦車が直撃を受け大破し、その階下からはOCU部隊が機関銃を据え、USNの装甲車に猛然と撃ちまくっている。

遙か上空では、制空権を守るUSNの戦闘機と爆撃機の侵入路を確保したいOCUの戦闘機が轟音を響かせ、弧を描いていた。

ウゝアンツァー同士の戦いも、今までにはない烈しさを見せている。この戦争によって最も劇的に進化したのは、紛れもなくウゝアンツァーだった。

特に、ウゝアンツァーの武器にはありとあらゆる物が試作、破棄を繰り返していた。

フォートモナーナス防衛戦は試作兵器の展覧会であるかのように、未完成の試作兵器が投入されていた。

中でも役に立ったのが、ネットガンだった。これは、原始的ながら、防衛戦には有効であった。試作兵器であるシーキング型や特殊ウゝアンツァーであるクリントン型の火力はこの連携は抜群の効果を発揮した。

それらの兵器によって支えられていた戦線だが、失敗作も当然ながら多く、形勢を逆転するには至らなかった。

市街のあちこちで激戦が続いたが、戦線の一角が敵の特殊ウゝアンツァー、グランテスによって崩された。

「こっちに応援を頼む！どでかいヤツが辺り構わずぶっ放してるんだ！」

「もし、自分が生き残ったら、スタンプカードを進呈します！」

交戦地域には、パラダイスバーガーが売られているファストフード店がある。

パラダイスバーガーは、タンゴ・チームのランディ・オニール二等軍曹の好物だった。

「みんな、俺の為に必死で戦ってくれ！」

「了解。」

軽口を叩くタンゴ・チーム。

「くそっ！ たった今スタンプカードは無効になった。」

それは、パラダイスバーガーの消失と同時に、戦友の戦死を意味していた。

それを聞いたタンゴ・チームの別働隊であるウォルター・フェン中尉、ランディ・オニール二等軍曹、ダモン・マンフィールド伍長、ジェイミー・ビンソン伍長、クリスティン・クーリッジ伍長、ジム・マクラレン伍長の六人がそれぞれの愛機を駆り、グランテスの撃破に向かった。

リーダーのウォルターを筆頭に、抜群のチームワークを誇るタンゴ・チームの前方には、両腕に武器を内蔵した特殊ウェアアンツァーがそびえていた。

右腕に強力なライフルを装備し、左腕には巨大なパイルバンカーを備えている。さらに、機体の股間に当たる部位に大型の機関砲を装備している。

タンゴ・チームはその姿を認めると、散開し、戦闘体勢をとった。

「みんな、行くぞっ！」

ウォルターの声が響いた。

一方、ウォルター・フェン中尉率いるタンゴ・チームの担当区域には、偵察隊の面々が予備隊として加わった。

既に、タンゴ・チームによってOCUの機動戦隊の一部隊が撃破されていた。

しかし、後続の部隊が接近している。

数はそれほど多くはない。

「敵だ！全機、油断するなっ！」

シュレアの掛け声を聞いた面々の機体が戦闘体勢に入る。ワタルは、一瞬遅れで戦闘体勢に入った。

敵のウ、アンツァーが右腕を持ち上げ、持っていたマシンガンの銃口を偵察隊に向けた。

「今だっ！」

シュレアの合図で、レオンのガトリングガンが唸りを上げ、狂暴な弾幕の嵐を発生させた。

その内の一発が爆薬が満載されたトラップ車両に引火し、敵のウ、アンツァーは一瞬にして鉄屑となった。

それをきっかけに、偵察隊の戦いが始まった。

第二十二話 突破

「ぐうあああっ！」

ニナが負傷者の傷口を押さえると、あまりの激痛に兵士は悲鳴をあげた。

傷口からは血が溢れた。

「これくらいならなんとかなるわ。頑張って！」

負傷者を運んできた兵士が救命キットを用意した。シェルターの一 corner は、野戦病院になっていた。

「生理食塩水を用意して！」

「わかった！」

ニナが止血するための応急処置を施している横に、新たに一人の負傷者が運びこまれた。傍らに、軍医が付き添っている。

白衣の袖は肩から破られている。

「ニナ、ニナじゃないか！」

「先生、無事だったんですね！」

「世間話はあとだ。そっちの怪我人はどうだ？」

肘まで負傷者の血で赤く染めた医師は慣れた手付きで処置を始める。

「応急の止血をします。しばらくは持つでしょう！」

「そうか、こっちは重体だ。手伝ってくれ！」

「はい！」

ニナが応急処置を終えて、医師の脇に立つと、重体の患者の状態を確認する。

患者の腹部に大きな穴が開いている。

「先生・・・！？」

「諦めるな！まだ終わってない！」

ニナの戦いは佳境に入った。

「どうだ！ここは通さないぜ！」

ニャンが敵の機体を撃破した。偵察隊の半数が既に撃破、あるいは後退していたが、未だに戦線は維持されていた。

「ワタル、大丈夫か！？」

シュレアがワタル機に肉薄するストライカーを撃墜した。

「シュレア隊長こそ！」

ワタルはマイク機と連携して敵の機体を撃墜した。

マイクは、直後に放たれたロケットの弾幕をかいくぐり、三人に合流した。

「ほらよ！敵の武器だ。」

マイクは敵のウ・アンツァーから奪ったマシンガンとショットガンを、それぞれワタル機とシュレア機に手渡した。

「キッド、リペアはあとどのくらいだ？」

キッドはマシンガンでロケットを放つヘリコプターを牽制しながら答える。

「あと僅かです！」

「シュレア隊長、数機応援に駆け付けました。味方です！」

応援のウ・アンツァーの指揮官から、シュレアに無線が来る。

「私も戦う。状況を説明してくれ。」

「た、大佐っ！？なぜウ・アンツァーに？」

応援に来たのは、フォートモーナスの基地司令、ローランド・ブライリー大佐だった。

「私は根っからの軍人だからな。秘密裏に訓練を積んだんだ。デニス大尉にしごかれた。奴の訓練はきつかったな。うん。」

「分かりました大佐。敵の特殊ウ・アンツァーにより崩された防衛ラインをタンゴ・チームが埋め、タンゴ・チームの抜けた穴を我々が埋めています。大佐は、デニス大尉の元へ。」

「君たちは大丈夫なのか？」

「お任せ下さい！」

「わかった。健闘を祈る。」

そう言って、ブライリーは護衛を率いて場を後にした。

「隊長、いいんですか？せっかくの応援を・・・」

「いいんだ。デニス大尉の元なら、ここよりは安全だろう。」

シュレアは新たに出現した部隊に銃口を向けた。

「あのエンブレム・・・来ました！奴らです！キャニオンクロウです！」

グリーグの駆るシーキング型に弾薬を補給しながら、補給担当の整備士が声を張り上げた。

「前衛部隊は・・・壊滅したんだな？」

「はい・・・」

グリーグは決意した。

「野郎ども、後退しろ！ここは地獄の壁が引き受けた！」

それを聞いた整備士が叫んだ。

「大尉！我々も戦います！」

「ならん！明日までの時間を稼ぐんだ！」

「敵が後退する・・・？」

サカタは前方の様子に違和感を覚えた。

噂のシーキング型の砲口だけが、こちらを捉えている。

「！！」

サカタが機体をビルの際に隠すのと、轟音が炸裂するのはほぼ同じタイミングだった。

カメラには、寸前まで自分のいた場所が跡形もなく吹き飛んだ様子が映し出されていた。

「なんて威力だ！」

サカタは、シーキング型の圧倒的な攻撃力に戦慄した。

グリーグが絶対の自信を持って放った一撃は、期待を裏切った。いや、避けられたのだ。

グリーグは集中力を維持しながら、別の赤い機体に狙いを定めた。

「あれがシーキング型ね・・・」

敵機が自分に狙いを定めていても、フレデリックは冷静だった。静かに機体を後退させた。直後に側で砲弾が炸裂したが、それには構わず、カメラの倍率をあげ、シーキング型の映像を収めている。

グリーグが狙いを定めた砲撃を、赤い機体は最少の機動で避けていく。しかも、避けながら肩部のロケットでの牽制射撃をしている。ロケットはシーキング型の眼前で炸裂し、視界を煙が覆い尽した。

「見事な腕だな！」

キャニオンクロウの実力に舌を巻くグリーグだったが、負けるつもりはなかった。自らが戦死しても、時間が稼げれば彼にとっては勝利だからだ。

今度は紫色の機体に狙いを定めた。しかし、直後に視界の外へ隠れた。

「くそっ！ハエめ！」

戦闘は膠着を始めた。グリーグの放つ砲撃も、キャニオンクロウの猛攻も、互いに致命傷に到らない。

「なあ、ロイド。」

フレデリックはシーキング型のカメラ映像を見ながら続ける。

「あの機体、対空兵器が脆弱じゃないか？確かにあのキャノンは強力だが、他の兵装は股間にある機関砲だけだろう？あれじゃ、正面、それもかなり範囲が狭い。キャノン砲も正面にしか向かないようだ。」

「確かにな。・・・ハンス！頼めるな。」

「了解！」

グリーグの耳に警告音が届く。とっさに機体を後退すると、眼前に空から降ってきたミサイルが炸裂する。

「制空権を奪われたか！」

シーキング型がスモークディスチャージャー（煙幕）を作動させる。が、煙幕は起きなかった。が、弾が無かった。

「くそ！ 専用の弾など必要あるまいに！」

グリーグはシーキング型の機関砲を航空機に向けたが、角度が足りない。戦闘機の僅か下を機関砲の弾が飛翔する。

一発が機体に当たり、白煙を上げる戦闘機は離脱を始める。離脱する際に発射したミサイルはシーキング型の背後で炸裂した。

だが、グリーグが航空機に注意を奪われた隙にキャニオンクロウ隊はシーキング型を包囲していた。

もはや、グリーグに残された道は降伏か、突撃しか無かった。

当初の予定通り時間を稼いだ彼にとって、どちらも同じだったが、彼のプライドは前者ではなく後者を選んだ。

程なくして、シーキング型の最期の轟音が響き渡った。

第二十三話 第2次ハフマン紛争終結

戦闘は小康状態にはいった。

偵察隊は、長く続いた戦闘で疲弊しきっていた。

どう見ても、偵察隊の戦闘能力は無くなっている。

ほとんどの隊員が戦死・負傷するか後退している。

ワタルのゼニスX、ニャンとシュレアのゼニス改、マイクのプロスト、レオンのレクソンが、防御体型を維持しながら各々に白煙を上げている。中でもニャンの機体は左腕を失い、胴体部のセンサーも損傷を受けていて、撃破寸前だった。

傍らには、撃破されたキッド機が横たわっている。キッドの脱出を確認することは出来なかった。

「チッ、銃身が焼き切れた。」

レオン機が、装備していたガトリングガンを破棄する。破棄された銃からの照り返しで、ようやく陽が傾いていることを知った。

「逆光で、こっちは少し不利になるな。」

マイクはそう言って、ボロボロで使い物にならないシールドを破棄する。

破棄されたシールドから伸びる影が、少しずつ大きくなっていく。

ビル風の一陣が、硝煙や白煙、黒煙を掻き消した。

フォートモータス市の全てが夕日を受けて輝いているのを見て、偵察隊の面々は、一瞬だけ平和の風を感じた。

それは、錯覚だったはずなのに、どこか現実的な錯覚だった。

「・・・静かになった、のか？」

その時、銃声や砲撃のオーケストラが演奏を中止していた。

キャニオンクロウは、郊外に集結を始めた敗残部隊の掃討の任を受

け、荒野の中を再び進軍していた。

フォートモーナスの北東部に集結する部隊には、しっかりと補給部隊も揃い、戦力としてはかなりなものになりそうだった。

フレデリックが、部隊のヴァンツァーと、沈みゆく陽をカメラに収めていた。

ロイドたちも皆、同じように夕日を見つめながら、前進していた。こんなときに限って、カレンの顔が思い浮かび、傭兵から人間に戻る事ができた。

「・・・ロイド。東側で何かが煌めいてる。上手く隠れてるけど、熱源がある。敵機だ。」

申し訳なさそうなハンスの報告を受けたロイドは、すぐに頭を切り替えた。

「全機、前進！」

「待て、ロイド。」

指示を出した瞬間、キャニオンクロウの司令官であるオルソンから無線が入った。

「たった今、両国の間で調停が結ばれた。これより両国軍は国際平和維持機構の管轄下に入る。目の前のUSNとの戦闘はナシだ。」それを聞いたロイドは、ホッと胸を撫で下ろす。

これで、カレンを探することができる。

「了解、これより帰投する。」

「終戦・・・か。生き残ったのか、俺達。」

次々と後退していくOCU部隊を見て、ニャンが安堵する。

そんな偵察隊の元に、再び連絡が入る。

『偵察隊、北東部に集結した残存部隊に終戦を知らせてやれ。こちらからは連絡がつかない。』

「了解しました。偵察隊はこれより友軍の武装解除を開始します。」

『こちら偵察隊だ。第52単員機動小隊ならびに集結した部隊へ。たった今、調停が結ばれた。武装解除し、基地へと帰投せよ。繰り返し。戦いは終結した。基地へと帰投せよ。』

「そんな、嘘だ。」

偵察隊からの連絡を受けた指揮官は、耳を疑った。信じられなかった。

「それでは、散っていった仲間たちに顔向けできん！」

『・・・気持ちはよくわかるが、もう戦わなくていいんだ。帰投してくれ。』

「我々は誇り高きUSNの軍人だ！死んでいった仲間たちの想いを、無駄には出来ない！！全機、攻撃開始！」

『よせ、止めるんだ！』

「ロ、ロイド！USNの部隊がこっちに来るよ！」

ハンスの狼狽した声に、ロイドはハツとする。

機体を急旋回すると、銃声が鳴り響き、銃弾が風を切る音がそれに続いた。

「くそっ！奴らはやる気だぜ！」

ボビーが悪態を吐きながら機体を遮蔽物になりそうな岩陰に移動させる。

「ハンス！無線で終戦を呼び掛けるんだ！こんなことは、ごめんだよ！」

ラークバレーの生存者、モーリー・オドネルが叫ぶ。

「わ、判った！」

ハンスが慌てて端末を操作する。

「こちらはOCUのキャニオンクロウ隊です！攻撃を中止してください！戦いは終わったんですよ！」

『そうか、貴様らがあのキャニオンクロウか。今こそ、仲間たちの

無念を晴らしてやる!』

「ま、待ってください! ハフマン紛争はもう終わったんです!」

ハンスの必死の呼び掛けにも応えず、無線は一方的に切れた。

「バカ野郎が!」

サカタが叫ぶ。

「どうするんだ?」

USNの砲火を回避しながらJ・Jが尋ねる。

「どうするも何も、やるしかねえだろ!」

キースが毒づきながら反撃する。

「俺も、こんなところで死にたくはないぞ。」

ボビーも反撃を開始する。

「これが、戦場の狂気か。」

フレデリックは、いつものように撮影を始める。

「お願い、止まって!」

ナタリーは悲痛な叫びをあげながら威嚇射撃を続ける。

「あんたたち、バカよ!」

ヤンは迫り来る敵機の武装だけを破壊していた。

「姉さん! 危ない!」

ヤンの背後に回る敵機に、イーヒンのロケットが直撃する。

「お前たち、殺したく、ない!」

ポルンガは、必死の説得を続けた。

『・・・戦中のOCU部隊! 聴こえるか!? こちらはUSNの偵察隊だ! 停戦命令は届いたのだろう? 撃つのを止めてくれ!』

「僕たちだって、やりたくてやってるわけじゃない!」

ハンスが泣き叫ぶ。そんなハンスに向けて敵機が銃口を向ける。

「ハンス! 危ない!」

アルダーとロイドの攻撃、敵パイロットの絶叫、ハンスの慟哭、シユレアの説得。それら全てが重なり合ったとき、それを聴いたワタルは叫ぶしかなかった。

『くっ・・・全滅を、確認した。』

シュレアが呟く。

「・・・全機、帰投するぞ。」

複雑な気持ちで、ロイドは命令を下した。

「・・・USNの偵察隊、済まなかった。」

ロイドが謝る。

『・・・いや、こちらこそ、すまなかった。怪我人は出ていないのか？』

「いや、こちらは無事だ。・・・そちらの部隊に負傷者がいる。ハンス、位置を知らせてやれ。・・・以上、通信終わり。」

第二十四話 キャンプ襲撃

第2次ハフマン紛争が終結してから一週間が経った。シュレア率いる偵察隊の人員が不足しているため、再編が急がれていた。

もつとも、偵察隊だけでなく、USNのハフマン島駐留軍はどの部隊も似たようなものだった。

脱出の確認の出来なかったキッドだが、コックピット内で気絶してただけで、無事に復帰していた。

偵察隊は無事だったキッドを含めた6人を除き、戦死もしくは負傷していた。

機体整備の監督をしていたシュレアの元を、マイクが訪ねた。

「隊長、ちょっと話があるんだ、来てくれ。」

シュレアはライト主任の部下に一言告げてから、マイクに従った。2人がパイロット詰所に入ると、ワタルがいた。ワタルはタケシの遺品となった認識票を見つめていたが、慌ててそれを自らのロッカーに戻した。

「何だ、ここにいたのかワタル。ちょうど良いや、あとはお前と隊長だけなんだ。」

「なんか話があるみたいだが。できるだけ手短にな。このところバタバタしているんだ。」

「ああ、戦争が終わったからさ。この島に用事は無くなったんだよ。だから、部隊を抜きたいんだ。」

「あ……」

ワタルは戸惑った。傭兵とはいえ、マイクとは共に生き抜いた仲間だった。仲間との別れに、ワタルは一抹の寂しさを覚えたのだ。

「……そうか。そうだよな……」

「何だよ。俺はただの傭兵だろ。きっぱりとクビを宣告するだけで良いんだぜ？迷うことなんか無いだろう？」

「・・・もう決めたのだろうか？なら、何も言うことはない。」

「マイクさん！」

ワタルは、荷物を持って機体に向かうマイクを呼び止めた。

「最後に、教えて下さい。どうして、傭兵になったんですか？どうして、戦う生き方を選んだんですか？」

「・・・なあ、ワタル。傭兵にとっちゃ、それはタブーなんだぞ。傭兵なんて、戦争やって生きてるクソみたいな存在だ。ただのクソに理由なんか要らない。撃って、爆破して、殺す。そしていつの日か、殺される。それだけだ。」

マイクはワタルには視線を送らず、続ける。

「お前は国を守るために戦っている。理由なんて、それでいいんだ。守りたい国や家族・友人を無くした人間には、理由なんて得られない。・・・生き残るために仲間に手をかけてしまった俺には、平穩は得られない。戦いに身を置くことが、みんなへの償いだ。」

「マイクさん・・・」

「・・・あの娘のこと、大事なら迷うなよ。」

マイクはそう告げると、足早に機体に取り込み、偵察隊の元を去った。

「・・・ワタル、お前らとは、出来れば闘いたくないんだけどな。」

マイクは愛機と共に、ソレイトの街へと向かった。

偵察隊の5人の駆るヴァンツァーは、補充が間に合わないまま、偵察に駆り出された。

ハフマン島で最も険しい山脈、タッカー山脈への偵察。紛争が集結して以来、活動の噂されるテロリストグループへの警戒だ。そのテロリストグループの根城がタッカー山脈である可能性が最も高く、UN軍司令部は軍備の補充前に襲撃されることを恐れていたのだ。

そのため、偵察を主とする部隊が24時間体制で警戒を続けた。とはいえ、ヴァンツァーの共通規格は民間での購入を容易にしている。頻繁にヴァンツァーが行き来する状況では、偵察隊の役割は本来の偵察ではなく襲撃に対応するための遊撃戦力といった方が正しい。

民間の業者が運ぶパーツや各企業の試作機、平和維持機構の機体まで、ありとあらゆるヴァンツァーが確認される。

そんな中、OCU所属の部隊が近郊に現れた。部隊は野戦病院があると報告された空き地で止まる。

一体どんな用事があると言うのか。

偵察隊は、動向に注目していた。

「頑固なじいさんだけど、評判は良いみたいだ。」

野戦病院で治療を受けている人から話を聞き終えたイーヒンが報告する。

どの隊員からの報告もほとんど同じ内容だった。

紛争終結の立役者であるキャニオンクロウだったが、傭兵部隊に過ぎない彼らは休むことなく新たな任務に就いていた。

テロリストグループ『ハフマンの魂』の掃討作戦。その一貫として、テロリストとの関係が疑われる医師、ブラウン博士の調査を行っていた。

「みんな言ってた。ブラウン博士は悪い人じゃないって。」

最後に、ピウィーがロイドへ報告する。

「ケツ、無駄足だったのか？どうする？ロイド。」

キースが愛用のタバコを吐き捨てながら尋ねた。病院のスタッフから睨まれたが、キースはそれを無視している。

「・・・戻ろう。」

ロイドが言った矢先、突如として轟音にも似た銃声が木霊した。

「やっと見つけたぞ！博士。我々と一緒に来てもらおう。」

蒼い塗装のヴァンツァーの一団が、野戦病院であるテントを取り囲んでいた。

「チッ！やっぱりあのじじい、テロリストの仲間だったのか！」

キースが身を屈めて物陰に隠れる。

「くそつ。サカタやJ・J・はどうした？何を油売ってやがる！？」
アルダーが小声で怒鳴る。

「そこまでだ。全員武器を捨てて投降しろ。」

ようやく、周囲に散開していたサカタ、J・J・、ポール、コング、ボビーが駆けつけた。

背後から現れたヴァンツァーのエンブレムがキャニオンクロウのそれだと気づいたテロリストは狼狽した。

「く、来るな、来たらテントを撃つぞ！」

刹那、銃声。

「どっちが早撃ちか、試してみるかい？」

ボビーの放ったライフルの弾が、テントに銃口を向けたヴァンツァーの腕を捉える。

「く、くそつ。相手はたったの五機だ！やっちまうぞ！」

「隊長、出ました！テロリストグループと思われる一団が野戦病院に向かってます！」

「司令部に打電。周囲で最も近い部隊は？」

「さっきの部隊です。」

「我々も向かうぞ。」

シュレアの命令で、五機のヴァンツァーが野戦病院に向かう。

「戦闘が始まりました！」

テロリストグループの行動に、どこか妙な統一性があると感じたサ

カタだった。先日、警備任務に就いた際に襲撃してきたグループには統一性は皆無だった。だからこそキャニオンクロウはそれがテロリストグループであると判ったのだが、今回は違う。どこかよく知っているような連帯感を感じるのだ。まるで、軍隊のような。

それを確かめる状況ではない。サカタはライフルの弾を敵機の脚部に命中させる。敵機はその場に倒れたところをコングに狙われる。コングは倒れた敵機の両腕を破壊した。これでヴァンツァーは無用の長物と化す。

ボールの放ったミサイルがコング機を掠めて飛翔し、コング機の背後に回った敵機の兵装を破壊する。そこへ、サカタが再び脚部を撃ち抜いた。

J・Jは少し離れた位置からバズーカを乱射する敵機に手を焼いていた。なんとか避けるものの、破片でライフルが破壊された。

「・・・そりゃ、無いぜ。」

だが、それに気を取られた敵機の視界を遮る形で、間にボビーの機体がライフルを構えながら割り込んだ。

その時にはボビー機の放った一撃がコックピットを撃ち抜いていた。

「俺の方が早撃ちだったみたいだな。」

ライフルの空葉莢が地面に落ちるより早く、敵機は崩れ落ちた。

偵察隊が到着する前に、戦闘は終結していた。

テントには傷はなく、周囲のそこかしこで戦闘の痕跡が残るだけだった。

「隊長、さっきの部隊、キャニオンクロウですって。・・・さすが、としか言えませんね。」

ニャンが言う言葉に、シュレアは息を呑むしか無かった。

戦時中に交戦しなくて良かったと、シュレアは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0444b/>

FRONT MISSION ～SCOUTING PARTY～

2010年10月14日12時56分発行